

山想俱楽部

INDEX

contents



14-29 夏の恒例 海外登山
6月：ギリシャ・オリンポス山とイデ山登頂

冬の恒例 海外スキー登山
67-70 石原達夫
「2月：ドロミテ・コルチナダンペッツオのスキー」



ギリシャ・オリンポス山とイデ山

- 16 序文 石原達夫
- 17 6月 25日 酒井展弘
- 18 6月 26日 武田鞆子
- 19-20 6月 27日 高橋聰
- 20-21 8月 28日 日出平洋太郎
- 22-24 6月 29日 寺田美代子
- 25 6月 30日 寺田正夫
- 26 7月 1日 吉永英明
- 27-28 7月 2日 横田昭夫
- 28-29 7月 3日 廣島孝子



2014年
4 石原達夫「50年前の思い出で 雪崩からの生還」

6 川村光子「4月：奈良の山旅」

14 「6月：ギリシャ・オリンポス山とイデ山登頂」

30 高橋聰「6月：岩殿山と乾徳山」

34 田矢八束
「7月：北アルプス 0m～3000m(親不知～焼岳)縦走」

43 石原達夫「8月：室堂から太郎平・折立の縦走」

51 田矢八束「9月：70の爺さん二人アルプス漫歩」

57 奥秩父国師ヶ岳、北奥千丈岳

59 小亀真知子「10月：紅葉を求めて」

59 紅葉の京都・愛宕山と名称散策

石岡慎介「11月：嵯峨野路の紅葉山行」

2015年

63 醍醐純一「12月：忘年山行」

65 高橋聰「2月：スノーコース」

71 横田昭夫「3月：日光白根山登山」

72 高橋聰「1月：新年会」

73 西谷隆亘「最近の川づくり」

川井靖元「表紙、裏表紙写真」

27年度行事及び山行参加者 27年4月1日～28年3月31日

① 奈良の花を求めて名所、旧跡を訪ねる 期日 4月11日～13日

参加者 (12名) 吉永、石原、高橋、田谷、醍醐、西谷夫妻、武田、横田、小亀、廣島、川村

② 岩殿山と黒川鶏冠山。 期日 6月8日～9日

参加者 (11名) 武田、廣島、西谷可江、川村、石原、横田、醍醐、高橋、吉永、酒井、山村

③ ギリシャのオリンポス山とイデ山。 期日 6月25日～7月4日

参加者 (11名) 吉永、武田、日出平、寺田夫妻、川井、横田、酒井、廣島、石原、高橋

④ 日本海親不知～焼岳 期日 7月28日～8月11日

参加者 田矢、醍醐

⑤ 五色～薬師岳 期日 8月2日～5日

参加者 西谷(可)、廣島、吉永、酒井、石原

⑥ 読売新道 期日 9月9日～9月18日

参加者 田矢、醍醐

⑦ 紅葉を求めて 期日 10月26日

参加者 12名 平井、小亀、寺田夫妻、石原、廣島、関口、西谷夫妻、大塚、川村、山村、

⑧ 忘年山行 青梅線古里駅より丹三郎尾根～御嶽山 期日 12月12日～12月13日

参加者 10名 石原、石岡、小亀、高橋、武田、寺田夫妻、日出平、廣島、醍醐

⑨ 新年会。 期日 1月13日

参加者 18名

吉永、高橋、石原、森、田谷、醍醐、菊池、小亀、日出平、大塚、西谷夫妻、寺田夫妻、川村、廣島、川井、下河辺

⑩ ヨーロッパスキー 期日 1月13日

参加者 石原、酒井、廣島 他2名

⑪ スノーコース 期日 2月6～8日

参加者 10名 酒井、横田、菊池、高橋、醍醐、下河辺、田谷、小亀、石原、武田

⑫ 日光白根山 期日 3月22～23

参加者 7名 石原、醍醐、高橋、横田、西谷夫妻、吉永

27年4月より28年3月迄に一度でも行事、例会等に参加された会員

石原達夫、菊池武昭、高橋聰、下河辺史郎、醍醐純一、田矢八束、大塚幸美、廣島孝子、寺田正夫、寺田美代子、吉永英明、西谷隆亘、西谷可江、小亀真知子、日出平洋太郎、武田鞆子、横田昭夫、小笠原辰夫、川村光子、川井靖元、関口興洋、酒井展弘平井喜久枝、石岡慎介 山村英彦、森武昭(26名) 現在会員数 50名

今回は生涯登山のお話ではなく若いころの、50年以上まえに経験したことを書いてみたい。

学生時代は1年生の夏から、学んでいた大学の山岳部監督の肝いりでヒマラヤ登山を目指して研鑽している少数精鋭のグループに下働きという事で入れてもらっていた。当然のことながら登山の主体は積雪期登山ということで、在学時代4年間は1人も後輩を持つことなく冬山に情熱をこめて下働きに徹していた。

しかし大学を卒業して社会人となって2～3年経ったころ、ヒマラヤ登山したいという強い願望が沸々と煮えたぎり冬山にかける時間が不足していることに焦りを感じていた。したがってその頃の冬山登山は短期間に濃縮した内容のものとなっていた。その頃に遭遇した雪崩を古い記録から拾い出した。過去何回か雪崩に遭遇しているが自分が雪崩発生源となった想い出深い1件についてある。

まじめに会社勤めをしている者には冬山登山に当たられる正月休みは12月30日から1月3日までの5日間だけになる。これをどう有効に使うかがまさに悩ましい問題であった。

当時私が帰属していたグループは、ヒマラヤ登山の主流となっていた重厚肥大なポーラメソッドを排し、少数メンバー短時間登攀のラッシュタクテクスに似た方法を研究していた。それを実践するには大型で長距離のコースがとれる山塊が冬山の対象という事になる。

昭和37年の冬山は上層部の議論の結果、剣岳ということになり、短期間5日間の参加者はサポート隊として活動し、本体、サポート隊とも有意義な経験が出来るように配慮された計画となった。つまり、私が他グループから預かった新人たちの冬山訓練を兼ねたサポート隊を率いて、小窓尾根をルート工作しながら登り、本隊をアシストするというものであった。本隊は馬場島のベースから赤谷尾根から大窓、小窓、小窓王をへて三の窓に最終キャンプを置き、ここから剣岳山頂を往復し、小窓尾根を下るという9日間のプランであった。

私たちサポート隊は3日遅れて馬場島のベースを出発し、小窓尾根を、これも訓練の1つとして下降する重装備の本隊のために要所にフィックスを張りながら登り、北方稜線主稜とのジャンクションである小窓の頭で本隊に会い、そのまま先に下山するという案であった。この冬は雪が早く、暮れにはドカ雪があったので私たちサポート隊は白萩川のタカノスワリあたりは雪崩を恐れて赤谷尾根まで巻いて通過し、夏道と同じく雷岩から尾根に取りつき、ニードルの手前1,900米地点に天幕を張った。天気はおおむね安定していて顕著な新雪は降らなかった。次の日は、新人4名と中堅2名を引き連れ、フィックスを張りながらニードルを超えて、ここで昨日までのラッセルで疲労の著しい新人3名は中堅1名を付けて引き返させた。私を含めた3人でドームを登りフィックスを張る。これから最大の難関となるマッチ箱に取り掛かるわけだが、これまでのスノーリッジは大きな雪庇が張り出していた。

記録を見ると小窓尾根の雪庇は一般に西仙人谷（白萩側）に張り出すということだが、場所により池の谷側にも張り出していて、一様ではない。その都度私が雪庇を確認してトップで渡り、そのトレースをスタッカットで通過させた。小窓尾根の最難関といわれるマッチ箱の取付きは、手前にある少し長い急な登りのリッジ通しだが、どうもこのリッジは西仙人谷側に2米ほど雪庇の張り出しがあるという判断と、どうせマッチ箱は池の谷側からトラバース気味に雪壁を登ることになるだろうというやや軽い判断で、私が池の谷側を雪稜の先端から3米ほど下をトラバースし始めた。あと3米くらいで渡り切ると思った時、リッジの上端が動いたように見えた。私は子供のころ時々景色が揺れて見えるという目眩症状を持っていたので、その再発かなと思った瞬間足もとがいきなり動き出し、雪崩だと解った。とっさに1米ほど先の斜め右下に見えた岳樺の枝に飛びつき危うく難を逃れることができた。雪崩はそのまま轟音と共にもうもうと雪煙を上げ池の谷に落下していった。助かった理由はザイルを着けていなかったこと、ラッセルトップなのでザックが軽く身軽に木に飛びつけたのだと思う。原因は雪庇が張り出していると思ったのは実は誤りで、ここは風の加減で雪庇の張り出しのない本当の雪稜だったのだ。その急斜面を下で切ったので雪崩たのだ。

結局この辺りにフィックスを張り、その先のマッチ箱は時間をかけて慎重に登った。これで予定時間を大幅に超過してしまったので、目的の小窓の頭まで行くのは諦め、本隊と交信をし、その手前にある2,650米ピークの下で引き返した。

この雪崩についての結論としては雪稜の状況観察は十分に行い先ずは雪庇の有無、有ればどの位かをしっかり見極める、さらに雪の安定度はどうか、というチェックが不十分だった。ここまでいくつかの雪稜を無難に通って來たので安易に流れてしまったのだ。

その他の自身の雪崩経験により、元々が慎重な私は雪崩に対しては高度な注意を払うようになった。その後、山岳救助隊のボランティアメンバーとして雪崩遭難者の救援に従事したが、結果すべて遺体収容となった。雪崩に巻き込まれ、完全にデブリの下になった人で生還したという例を私は聞いたことがない。雪崩対策の3種の神器と言われているビーコン、ゾンデ、軽量スコップは埋没者の生還には無力ということを理解すべきである。まずは雪崩の出そうなところに近寄らない、雪崩の発生を促すような行為はしないということに細心の注意を払うことが肝心である。

以上

冬の剣岳西面
左から小窓尾根マッチ箱、小窓の王、三の窓、剣尾根、ドーム稜、長次郎コル、山頂、早月尾根

例会山行

奈良の山旅 山の辺から室生寺



国宝 豊山 神楽院 長谷寺本堂

期 日 平成21年4月11日（土）～13日（月）

参加者 石原達夫、高橋聰、吉永英明、武田鞠子、西谷隆亘、西谷可江、小亀真知子、田矢八束、横田昭夫、廣島孝子、醍醐準一、川村光子 以上12名

4月11日（土）

東京駅8時33分発ひかり505号にて、京都乗換え伏見駅11時25分着、昼食時には全員集合し、おそばを食べ、これからいよいよ千の祈りのお山伏見稻荷へ。外国の観光客の多さに驚く、日本観光スポット第1位とか。多くの人がまず思い浮かべる千本鳥居の朱塗のトンネルは本当に1000本あるの？奥宮～奥社間の千本鳥居の数は800本で稻荷山全体の数はおよそ1万本とも言われている。風雨や経年劣化による破損が激しい物は修理・建替えられる、5号サイズで¥175,000、10号だと¥1,302,000で奉納され、すべて企業や個人の寄贈で建てられているとのこと。

眼光鋭い狐の石造は福をもたらす神、でつまり靈獸である。木々の間を風が通り陽がさすと、山の緑と朱塗りの千本鳥居が映え、山全体が神秘的さえ感じた。

稻荷駅15時15分より天理駅に向かう、駅よりタクシーで奈良プラザホテルに17時15分に到着しチェックインした。

4月12日（日）

“山の辺の道”天理より桜井までは16.4Kmの道、古来大和は国の発祥地と考えられ、日本のルーツを求める人々が、この地の山裾の道を歩き、そこから「山の辺の道」が拓かれたといわれています。

柿本人麻呂を始めとする万葉歌人の歌碑が多数残るこの道は、景観美に加えて有名な神社や数多くの古墳が点在し、まさに古代文化を慕う道です。

ホテルより8時30分、シャトルバスに乗り天理駅に着き、そこから天理教本部のお膝元の立派な施設を左右に見ながら石神神宮（いそのかみじんぐう）へ向かう。石上神宮は日本最古の神社の一つで歴代の天皇の崇敬が厚く奈良朝以前から神宮の号を持つのは伊勢神宮と石上神宮のこと、大きな神杉が歴史を物語っているようだ。

“未通女等が袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ
思いき吾は（柿本人麻呂）”

9時30分永久寺跡、廃仏毀釈で廃寺となり、いまではわずかに池を残すだけで歴史の厳しい流れを感じました。



（伏見稻荷大社奉納鳥居の列）

みかん畑を見ながら、春日造り檜皮の屋根を持つ夜都伎神社をすぎ、竹之内・萱生環濠集落を通り、小高い古墳の面影を見ながら長岳寺に向かう。

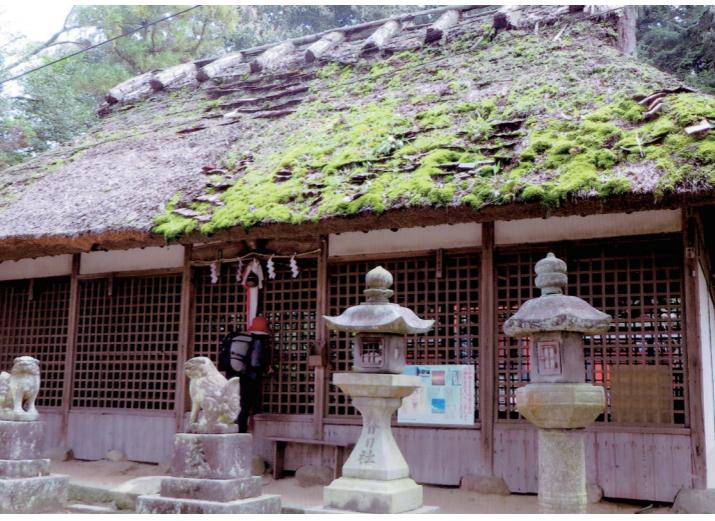
12時10分到着、長岳寺は天長元年淳和天皇の勅願により弘法大師が大和神社神宮寺として創建された古刹であり幾多の栄枯盛衰を重ねており、我が国最古の美しい鐘楼門があり1万2千坪の広く静かな境内には四季おりおりの花が咲き、安らぎを参拝者にあたえる。天理市トレイルセンターを抜け、天皇陵としてはもっとも古い崇神天皇陵は全長約242mの前方後円墳で周囲は濠がめぐらされており、鬱蒼とした森を形成していた。歩くこと10分、景行天皇陵があり、山の辺道の上陵ともいい丘陵の先端を利用して3段に構築された前方後円墳、全長約300m周囲約1Kmに濠をめぐらした堂々とした古墳であり、初期ヤマト王権の栄えた事がうかがえる。

このコースには万葉の歌碑が多数残され、

“やまとはくにのまほろばたなづく青がき山ごもれる大和しうるわし”（古事記）、

万葉びとの息づかいを伝えるのが天理市石上神宮から桜井市金屋までの、古社寺、古墳、万葉歌碑、多彩な伝承の舞台などが展開し、知らぬ間に歩く者を古代の幻想の世界へと誘ってくれている。

春のおだやかな小春日和を万葉人も歩いたであろうこの古道を、みんな想いおもいに歩き、巻向川を渡り檜原神社へ。



（夜都伎神社）



（檜原神社）



（長岳寺）



（長岳寺）

この檜原神社は大神神社の摂社のひとつと言われており、三輪山中にある盤座を神体としているので本殿はなく、天照大御神を祀り、元伊勢とも呼ばれている。草むらの歌碑、石塔、空にはウグイスの鳴き声が、何と気持の良い癒される瞬間だろう。しばらく歩き扶井川を渡ると立派な大神神社（三輪明神）にでる。背後の三輪山を御神体とするわが国最古の神社である。國のまほろば、大和盆地の東南に位置する三輪山は全山、松、杉、檜等に覆われ古来より神の鎮まりますお山として崇められていた。

拝殿前にて西谷さんと私はI氏より「かしこみかしこみ……」と祝詞を上げてもらい、祈祷を受けた。

これより大神神社を後に、一路南へと向い平等寺、金屋の石仏、喜多美術館を通り桜井駅へ。大和川（初瀬川）水路の終点に日本最古の市場である海柘榴市が八十のちまたとして開け、南北に走る日本最古の産業道路であり山の辺の道と共に、この三輪の地は交通の要所ともなった。当時の面影が感じられる歴史的街並と文化が脈々と続いてきた古都痕を辿った1日でした。

今夜の宿は駅前シティペンションサンチュリー、16時30分着
(私の万歩計では31,629歩 1日良く歩きました)

4月13日（月） 本稿のみ 石原・記

夜半より雨が降り始めたようだが、朝には風も出てきて歩きは絶望的な天気となってしまった。その点、臨機応変のわがグループは、今日の目的地は変えず電車とバスを利用しようと言う事になる。昨日は十分すぎるほど歩いているので皆に異論はない。

近鉄にて長谷寺駅で下車、かなりの坂道を下りて伊勢街道に出る。当初計画ではここを大和朝倉駅から歩いて来ることになっていた。小雨と風のなかをだましまし傘をさし長谷寺に向かう。山門に近づくにつれ土産物屋が多くなり小規模の門前町ふうになって来る。長谷寺は本堂までの参道は屋根で覆われた登廊と云う石段の廊下なので雨にぬれる心配はない。周囲の桜はもう終わり僅かに遅咲きの花がある程度で有名な牡丹はまだつぼみの段階で今は花の端境期だ。2度ほど曲がると本堂の横に出る。今は特別御開帳で1,000円を喜捨すれば本尊十一面觀音の御足に触れることが出来るとか。もちろん本堂では正面からご本尊を拝する事は出来る。本堂前方に張り出す舞台は眺めがよくここで記念撮影をする。

帰路に登廊の途中にある塔頭の1つの月輪院でお抹茶を喫す。ここの方か品の良いご婦

人のご好意で月輪院のご本尊を拝ませていただく。長谷寺駅に戻り次の目的地の室生寺に向かう。

近鉄を室生口大野駅で降りる。ここも晴れていれば大師の道12キロを歩く予定だった。さて駅を降りるとタイミング良く室生寺行きのバスが待っている。都合により2人が乗り遅れたが、タクシーで追いかけ終点に着く頃には一緒になった。先ずは腹ごしらえとうどん屋に入る。室生寺あたりは地形のせいか風が強い。雨は何とか収まったが風の強さは生半可なものではない。境内のアナウンスは落下してくる枝に注意を促している。なにしろ過去には強風のため国宝の五重塔が破壊されたくらいの所だから気を付けるに越したことはない。女人高野室生寺と書かれた立派な石碑の立つ名刹にふさわしい威厳のある山門を過ぎ、仰ぎ見る階段を登り到達する国宝の金堂や本堂、五重の塔は思ったより小ぶりで質素に見える。登山グループらしく急な石段を登り切って奥の院に到達し記念写真を撮る。遙かすぐ下に道路が見えこの奥の院が急峻な岩山の上にある事が判る。落下した枝に注意しながら山を下り、寺を後にする。強風にさらされて待つことしばし、出発時刻丁度に来たバスに乗りこむ。バスは室生寺の玄関口に当たる大野寺の脇を通り、車窓から宇陀川の対岸の岩壁に彫られた弥勒磨崖仏を見る。

室生口大野駅から近鉄の乗り、名張駅ですぐ後から来た名古屋行き特急電車には特急券を買う間もなく乗り換える。名古屋駅では何となく流れ解散となりそれぞれの先に向かい、今回の山旅を終わる。



（室生寺 山門）



（室生寺五重の塔）



（室生寺奥ノ院での集合写真）



（奥ノ院への階段）



（長谷寺登廊）



（本堂舞台の集合写真）



集合写真

稲荷山四辻の茶屋前

前列

石原、小亀、廣島、醍醐、吉永

後列

田谷、西谷、高橋、武田、横田、川村、西谷

例会山行

イデ山登頂

ギリシャ・オリンポス山と



パルテノン神殿

スコーリオ峰山頂



スコーリオチーム メディカス・チーム

スコーリオ峰山頂にて

ギリシャ・オリンポス山登頂とイデ山登頂

序文

石原達夫

ギリシャ・オリンポス山登頂とイデ山登頂

期日 6月25日から7月4日

参加者 高橋聰、吉永英明、酒井展弘、横田昭夫、廣島孝子、日出平洋太郎、
武田鞠子、川井靖元、寺田正夫、寺田美代子、石原達夫（団長）

会員外 山田功（添乗・案内）

2012年の「ヨセミテ・セコイアの山旅」以来、山想倶楽部では夏の海外登山を恒例にしている。2015年は登山先をアメリカ、カナダ主体で2、3検討したが、結果として武田さんの推すダークホースのギリシャの山旅・オリンポス山登山に決まった。

ギリシャというと観光であまりにも有名で、初め少し引けたが、山田さんの協力を得て調査をしてみると3,000メートルに近い標高を持つオリンポス山がなかなか面白そうで、一般観光者がついでに登る山では無さそうだ。

オリンポス山はギリシャ神話の12神が坐する12のピークからなっているが、最高峰のミディカスピーク（2,917メートル）はクライミングで到達するピーク、2位のピークは5メートル低いスコーリオピークで容易に登れるピークである。そこで、隊を二つに分け、クライミング指向のミディカスチームと、エレガント指向のスコーリオチームにすることによりすべて円満解決ということになった。なお、ミディカスチームに付いたクライミング・ガイドはギリシャ屈指のベテランガイド2名であった。登山拠点となるスピリオ・アガピスト・ロッジは中腹に建てられた堅牢な山小屋で、慎ましい女主人以下の従業員のホスピタリティは心に残るものであった。

クレタ島のイデ山は問題なく登れる山だが、ギリシャ神話の主神ゼウス伝説に関わる山だけに興味が湧いた。登山基地になったアクソスのホテル、アルコンティコ・マニアス・ヤキントスは崖に建てられたユニークなもので、宿関係者一同の暖かいもてなしに一同深い満足感を覚えた。イデ山登山を含むクレタ島全体のガイドを引き受けてくれたアリスさんは魅力的な女性で一同たいへん盛り上がった。登山の合間の有名観光地の見物も現地ガイドの丁寧な説明で一層心に刻まれた。

今回も山田さんの旅程全体の入念な計画のおかげで、旅そのものがたいへんスムーズに、かつ楽しく進行したことを感謝したい。

以下日を追って割り当てられた方々からの報告を見ていただきたい。

6月25日 酒井展弘

初めての山想倶楽部の公式山行で若干の不安と期待を持って参加した。

6月25(木)日、羽田空港国際線3階Lカウンター前20時30分の集合に間に合わせるべく、タクシーを16時に呼ぶ。阪急電車とモノレールを乗り継いで伊丹空港に17時20分に到着。荷物検査で引っ掛かる。ヘッドラップを入れている袋の中に、常時ライターとマッチを入れていたのが良くなかった。スーツケースを開けてマッチを渡し、ライターを所持する事でOKとなる。荷物はアテネまで送付出来たので身軽になりホッとする。

18時30分発で羽田に19時30分に着いた。久しぶりの羽田空港に戸惑い空港の循環バスに乗り間違えタイムロスがあったが、集合場所へ約束の時間には間に合った。半分以上の人達が待っていた。山田さん、寺田ご夫婦、日出平さん、川井さん等初対面の方々に「初めまして酒井です。よろしくお願い致します」と挨拶して座席のチケットを受け取った後、全員集まった所でチェックインに向かう。

22時50分予定より5分早く離陸。離陸後気流が不安定で、90分位たってやっと食事の準備、提供を始めたが、また乱気流に巻き込まれて機体が激しく揺れて配膳が中断された。暫くすると気流が安定し、食事を終えひと眠りする。朝食を食べ終わると間もなく、予定より30分ほど早く26日早朝4時にパリ空港へ到着した。



パリ空港での乗り替え

6月26日 武田鞠子

昼頃、アテネのヘリニコン空港に到着。大きなバスにゆったり乗って、ギリシャに住んで43年の日本人ガイドの案内でアテネの街へと入る。まず目に入ってくるのがリュカベスト山、頂上にギリシャ正教の教会が建つ小丘で歩いて登るしかないが20分程だった記憶がある。

次は車窓からゼウス・オリュンピュイオンの神殿跡を見る。古代ギリシャ時代からローマ時代にかけて700年を費やして作られた古代世界一大きい神殿といわれている。カンサス(あざみ)の葉をデザインした華やかな柱頭を持つコリント式列柱はローマ時代の様式。現在は巨大な柱が13本残るのみだが、それでも往時104本の列柱に囲まれた美しい神殿であった片鱗は残っている。

この地域は古典期にはアテネの城壁の外であったが、ローマ皇帝ハドリアヌスが市城壁を拡張してアテネの市街に入れた。新市街と旧市街を画するハドリアヌスの門の内側には「ここはアテネなり、テセウスの古き町」外側にはここはハドリアヌスの町なり、テセウスのものに非ず」の銘板がある。

いよいよメインのアクロポリス、さすがに観光客が多い。今はプロピュライア(前門)とパルテノン神殿が修復中だ。

前門の右手にペルシャ戦争の勝利を記念して建てられたこじんまりとしたアテナ・ニケ神殿がある。イオニア式柱頭を持つ華麗な神殿。前門を上がると右手正面にアテナ・パルテノス神殿、これがアクロポリスのメイン神殿でペリクレス時代のアテネの最高傑作だ。左手はエレクティオン、これはアテナ女神、海神ポセイドン、彼と同一視されていた伝説的な王のエレクティアス、ヘパイスト等を祀ったイオニア式複合神殿で、カリアティデスと呼ばれる乙女達の柱像が可愛らしい。

ガイドさんの説明を聞き終えてから自由散策となる。アクロポリス南麓の斜面を利用して作られたディオニソス劇場とローマ時代のひとヘロデス・アティコスが作らせた音楽堂を上から見る。ヘロデス・アティコス劇場は今でもギリシャ悲劇や音楽等の上演に利用されている。

暑くて暑くて木陰が恋しい。下ると皆さんは売店でビールやかき氷をのんでいる。廣島さんがくれたかき氷が甘露だった。

今夜の宿はペロポネソス駅のすぐ前、夕食前に廣島さんと散歩に出る。駅へは出入り自由、時刻表を見ると列車は30分に一本しか来ない。帰ろうとすると貨物列車が来る。ものすごい車両の数に圧倒されてそれが過ぎるまで見ていた。

今夜は普通のホテル料理、シーフードが食べたい。ギリシャの第1日はこうして過ぎていく。



ニケ神殿



エレクティオニ神殿

6月27日 高橋 聰

25日の夜22:50に日本を出発したのだが、この日は朝5:00頃には起床しており、又飛行機の機中では殆んど寝むれなかったので、乗り継ぎやアテネ市内の観光の時間をいれると何と44時間も起きていたことになる。昨日は現地時間の20:30には寝て、今朝の起床は5:30だったので、9時間近く寝ているので元気一杯だが、それに反して天気の方は曇り空で、窓より外の道路を見ると早朝迄雨が降っていたようだ。

本日の旅は此のアテネよりリトホロ手前のホテルまでのバスの旅だけである。割り当てで本日の行動記録を書かねばならないが、バスの旅だけでは何も書くことが無さそうだ。今朝は元気一杯であると書いてみたが、持病の前立腺肥大を原因とした頻尿の為夜間に5度もトイレに行つたので何だか体がだるいが、バスに乗っているだけなので良いとするか。

朝食は7:00からだ。出ているのはパンに野菜サラダ、ハム、ソーセージ、ゆで卵、スクランブルエッグ、ヨーグルト、牛乳、ジュース、コーヒー等だがコーヒーとヨーグルトは美味しかった。食後ホテルの前にあるスーパーに明日、明後日必要になるであろう水を同室の酒井君と買いに行く。500cc 6本で0.84ユーロなので日本円に直すと一本が20円程度である。因みに350ccのビールが一本0.74から1.05ユーロであった。

9:00 本日の宿があるプラタナス・ピエリアに向いバスに乗る。約5時間のバスの旅である。

出発後1時間ほどでトイレ休憩をし、ひたすら高速道を走り、11:30海辺の町カマノボーラのカミーノというレストランにて昼食。水以外の飲み物を欲する人はオプションでビール、ジュース等を依頼し、先ずはパン、(バター、オリーブ、パストオリーブと一緒に)が出てきて、ツナと野菜のサラダが山盛り、とハンバーグ(フライドポテト、と焼いたズキーニ、パプリカ、ナスの付け合せ)であったが、ハンバーグは何かひき肉を固めて焼いただけという感じでパサパサ感が強く、僕は元々あまり好む食べ物ではないので今一の感であった。ハンバーグは100グラム程度の物が2つついており、大半の人が半分程度残していたが吉永、寺田の両名は完食していた。12:50バスに乗り出発後3時間程度(200~230キロ程)今宵宿泊するホテルまで掛るらしい。16:00にやっと今晚泊まるオリンポス・セア・ホテルに到着。割当てられた部屋は、目の前に庭が広がり、その先にはプールがあり、遠くには海が眺められ、シングルベットとダブルベットが付いていた。本日の夕食は19:00より、との事だが、18:00~22:00迄はビール、ワイン、ソフトドリンク、コーヒー等は飲み放題との事だが、若い時ならいざ知らず、もうそんなに飲めるものではない。



カマノボーラでの昼食

部屋のすぐ前に有るプールサイドで何やらパーティの準備かテーブルや椅子をボイ達が忙しそうに運んでいる。18:00 同室の酒井君と少し早いが、飲み放題のビールでも飲みに行こうかとラウンジに行くと、そこには既に武田、廣島、吉永、川井氏が好みの物を飲んでいた。武田君が 17:00 よりプールサイドで結婚式が始まると聞いたとの事だが、未だ何も準備が出来ていないが、プールには白鳥が二羽と鴨らしき鳥が数匹浮かんでいる。19:00 より僕たちの夕食が始まり外を見るとチラホラと結婚式の客らしき人たちが集まっている。21:00 頃になりやっと本日の主賓である花婿、花嫁が車で現れる。式場でケーキカットをして両親たちとそれを食して席に着くと勢いよく花火が打ち上げられ披露宴が始まったようだ。僕は 22:00 頃には寝てしまい、24:00 頃目が覚めたので外を見るとまだ盛んに音楽が鳴り響いていて、参加者たちがダンスを楽しんでいる。そして再度 2:00 頃に目が覚めたので外を見ると、静かで何の音もしていらず、誰の姿も見受けられないので既に終了したようだった。

8月 28 日(日) 日出平 洋太郎

二日は掛かるオリンポス山登山の初日、アガピトス小屋まで。

6:30 起床。太陽は既にエーゲ海上に顔を出している。このホテル(その名もオリンポス・セア)はフロントが 4F にある崖ぶちのリゾートホテルで眼下にプール、更にその下にエーゲ海が見える。河岸段丘のようだが、相手が海では数万年前に陸地が隆起でもしたのだろうか。相部屋の横田さんが眼をショボショボさせて、昨夜の結婚式(プールサイドでやっていた)が夜中過ぎまで煩くてよく寝られなかった、と爽やかではないお目覚めである。

昨日は移動日で、アテネから北方のオリンポス登山基地方面へ、右手にエーゲ海を眺めながら北上してきた。そしてトイレ休憩かと思って停車したところがこの高台のホテルだったのである。今日は持ち物を片付けて登山に不要の物はこのホテルに残し、二日分の荷物だけをザックに詰めて出掛けねばならない。朝食前の一仕事である。前方左手には巨大な山塊が横たわっていて、上部には雪渓も見える。頂上は雲に包まれているが、あれが目指すオリンポス山なのだろう。朝食を済ませ、荷物をフロント横の物置に突っ込み、昨日のバスで 8:37 出発する。



リトホロ登山口



ソウリで集合写真



プールサイドでは結婚式の準備

道は昨日の延長でアテネとテッサロニキを結ぶ E75 号線、海拔 100~150m のプラトー状の台地を走る。走り出して程なくテッサロニキまで 95km の道標を見る。8:53、E75 線に分れを告げ左手のリトホロ方面を目指す。リトホロはオリンポス山塊の麓にあり、そこから山が一気に立ち上がっている。登山ガイドが、今日はオリンポス山のマラソン登山がある。混雑すると思うが気を付けて! と突然話す。静かな山は望めなくても、記念にはなるか。9:00 リトホロ通過。この国には駐車場がないのか、道路は半ば駐車場である。行くほどに道の両サイドの駐車が邪魔になりだす。バスは大型だし、9:40 遂に車は立ち往生。終点のプリオニアまで残り 150m ほど、我らは 9:45 とうとう下車して歩き出す。登山口プリオニア(標高 1,100m)に着いて水を補給し、トイレに行くなどの出発準備をしていたら、漸くバスが現れて、これで帰りは大丈夫と妙なことで安心する。登山口は人、人、人だがマラソン登山のトップはもう降りてきた。何処まで行つてきたのか? 我らの今日の目的小屋アガピトス小屋(標高 2,100m)までだろうと思う。8 時出発で高度差 1,000m、それを 2 時間弱で往復か、若くて速い人はそんなものだろう。我ら斜陽族は登るだけで一日掛かりだが。

10:00 いよいよ登山口プリオニアを出発する。どんどんマラソン組が下ってくるので、すれ違いにチョイ休みができるのは有難いが、ストックの先端を前にして勇ましく下ってくるのには危険を感じる。10:30 ソウリで一休み、元気なうちに写真を撮る。10:51 馬糞が落ちている。荷運び馬が落としたものだ。11:05 休憩、ピガドウリ標高 1,380m 11:16。山に入れば天気は怪しくなるものだが、雲が垂れてきて、上の方はよく見えない。昨日までのカンカン照りとは様子が違う。12:25、雨が降りだした。素早く合羽を引っ張り出す人もいれば、その内止むさと、横着を決め込む人もいる。12:45 ゴマロスタロス分岐点通過。13:00 腹へったーでランチ休憩、標高 1750m。巨大な山塊だなあとつくづく思う。もう一踏ん張りか 13:21。14:02 雪渓を渡る。常夏のギリシャ、標高 3,000m 足らずの山に雪渓とは想定外。次第に実力差が出て、列はバラバラになる。14:07 最後の休憩 14:12。14:32 アガピトス小屋着。あまり濡れずに済んだ。聞き取りでは先頭は 14 時、最後は 15 時到着だったらしい。

小屋は石造りの立派な小屋で収容 120 名、我らは別棟の二部屋を占拠する。スキヤーズロッジと同じ蚕棚である。15:30 から遅い昼食。野菜スープやヌードルスープ、ジャガイモなどを小分けして頂く。その頃には土砂降りになる。多分夕立であろう、いつの間にか雨は止んで陽が差してきた。そろそろ夕食かと思われる頃、山が見える、の声に誘われて小屋を飛び出し、1 ショット。オリンポス山の最高峰ミティカス 2,918m がまるで怪獣が牙を剥いているかのようにそこだけ聳えている。19:30 夕食、食事はコーンスープに野菜サラダ、カレーライス、スペゲティーは皆で分けて。無論ビールやワインもたっぷり頂いてスヤスヤである。



アガピトス小屋到着



小屋から見るオリンポス山



6月29日 寺田美代子

今日はオリンポス山登頂を目指して、2100米にある山小屋からの出発です。

6:10 朝食はパン3枚にジャム、ハニー、バター、マーガリンが載った一皿に各々飲み物を選ぶ、これにゆで卵を買い添える人も多数。

7:30 集合、昨日から先導した山岳ガイドのアンドレに加えてクライミングガイドラザレスとアキが山小屋で合流し、我らは総勢12名、なんとこのオリンポス山に住むと伝わる神々と同じ数である。我々の足取りを山頂から見守っているのか？ 昨夜の雨も上がり朝霧の中ガイドを含めて15名で出発した。道はいきなり急登、杉林のひんやりした中を、小休止をとりながら進んだ。



途中の標識

9:05 ミディオラピーク第1ゲートに着く。案内板があり登山ルートや泊まった小屋の写真もあった。9:50 2700米地点に達す、この頃よりかかる太陽の暖かさに励まされた。太陽の神アポロンが少し顔をだしたのかな。

10:30 2845米、ここがミディカスの分岐地点、スコーリオチームとミディカスチームに分かれ各々のピークを目指す。メディカスチームは岩登りの危険なピークなのでヘルメット、ハーネスを着装、しっかり名前を確認後各々2名のクライミングガイドとロープでつながり切り立つた岩の裂け目を下って行く。送る私たちも心配で無事の再会を祈り、彼らも”笑顔で行ったと伝えてくれ”と少し大げさな別れで見送った。

アンドレと私たちスコーリオチームは11:30 2912米のピークに見事到着した。尾根は多少ガれていたが道はゆっくりした登りで道もしっかりとついていた。山小屋の犬が案内するかのように一緒についてくる。山頂では、金属箱の中にノートが置いてあり、登頂記念に会の名前と各々が自分を記名した。

ガスが多く開けた展望は無かったが、切れたところから雪渓の山並みがきれいだった。登頂を喜び合い下山開始、少し下るとアンドレが向うの丘に「ジャパニーズ」と叫ぶ。見るとミディカスチームの姿であった。あまりの再会の早さに信じがたかったが、確かにメンバーの姿が見えた。11:45頃合流、再会を全員で喜んだ。どうやら昨夜の雨水の流れにルートをふさがれ山頂手前で断念したこと、さぞかし残念であったことと思う。無事で何よりそろって昼食をとり、ミディカスチームはスコーリオピークに向かって出発していった。今度は安心して見送った。私等スコーリオチームもガレ道を気を付けながらもルンルンで朝来た道を下り、途中山田さん、高橋さんとも合流出来て花の写真を撮りながら楽しく下山した。山小屋付近まで下ると犬達が無事を喜ぶかのように出迎えに階段を上って来てくれた。実に可愛い犬達だ。14:05 山小屋到着。14:35分頃ミディカスチームも無事帰還、拍手で出迎えた。今日のために来てくれた2名のガイドさんに感謝し別れた。各自ゆっくりと過ごし、18:00 夕食、食べきれないほどのご馳走だ。豆のスープが忘れられない。ギリシャ北部のテッサリア地方に聳えるこの岩峰の名山オリンポス山の登山、がっしりとした標高2100米に建つ山小屋に2泊、今日は山小屋の夜を味わうこととする。



スコーリオ峰山頂



スコーリオからの下山

ミディカスチーム敗退の記 石原達夫



登攀の支度

2845米の分岐点でヘルメット、ハーネスを装着する。酒井、川井がラザレスガイド、吉永、日出平、石原が若手のエバンガイドにそれぞれザイルを結ぶ。

2人ともギリシャ屈指のクライミングガイドだ。残念ながら山田さんとガイドのコミュニケーションが不十分だったようで、私がリーダーだということが伝わってなく、初めからザイルパーティの分け方と順番がくるってしまった。さらにハーネスが必要ということも知らされてなかった。どうもどこかでコミュニケーションが不十分だったようだ。

見たところ岩の状況は良くない、昨夜の雨と一昨日の夕刻からの雨が山頂付近では雪となっていたようで山頂に至るルートとなるU字状の岩壁には日陰のためか斑に雪が残っている。気温は低く、薄いダウンジャケットを着てちょうど良いくらいだ。みなエキスパートという前提であったが、たかの知れた始めの5～60メートルの下りで足並みに相当なばらつきがあるのが判る。それはガイドもすぐ気が付いたようで、不慣れの人はここから返すかという話がガイド側から出たが、パーティの組み替えをするため岩壁の途中でザイルをほどくことは危険だということで結局このままで行くことになってしまった。

ルートは赤ペイントで印がつけてあり、また要所、要所にビレー用のボルトが打ち込んである。ガイドのザイルの長さは50米以上、当座の分はループにして持っているが、残りはザックの中に收め、必要に応じて繰り出して確保している。序盤の下降が終わると本番の登り気味の長いトラバースに移る。折からガスも切れ視野が開けて山頂付近がよく見えるようになる。確かに雪が残り岩も濡れていようだが岩慣れた連中にはそう難しいとは思えない。ガイドの1

人が先行して状況確認に行き、戻ってからガイド同士で相談しているが、結論として岩登りの経験の浅い人を含む混成パーティでは最上部の濡れた壁の安全な通過は難しい、ということを言われ残念ながら全員引き返すことになった。

ガイドはスコーリオがあるからそれに登ろうといって慰めてくれた。

分岐まで登るとスコーリオチームが下って来るのが見える。合流し全員で昼食とする。そのあと私等は難なくスコーリオに登頂した。スコーリオ峰の稜線のミディカス側は急峻な岩壁だが、反対側はゆるくスキーには絶好な斜度だ。その先のリッジを超えた反対側にはスキー場があるとか。ガイドから今度はスキーの時期においてと誘われた。そんな機会があればよいのだが。でもその前にやはりミディカスに登りたい。その時は少人数で一気に登りたい。



メディカスからの撤退



スコーリオ山頂(メディカス・チーム)

6月30日 寺田正夫

6:00過ぎ 朝食 7:40 いよいよ下山を開始した。2日間“スピリオス・アガピスト”小屋に宿泊して、オリンポス山のスコーリオスピーク(2912米)に登頂した思い出を胸に刻んで小屋を後にした。

下山の途中、しゃんしゃんと賑やかな音がするので何だろうと思ったらラバの1群が荷揚げに上がってくるところだった。馬方は1人でラバも繋がれてはいない、自主的に登ってくるようだ。すぐ第2群が登ってくる。この1隊は工事用のセメント等を運んでいるようだ。

2回ほど給水タイムを入れ、10:15 全員無事にプリオニア登山口に到着し、茶屋で飲み物等を買って送迎バスを待った。登ってきたときはマラソン大会とかでめったやたらに車が止まっていたが今日は1台もなく、バスは私たちの前に止まることが出来た。

10:50 一路リトホロのブテックホテル・オリンピアへ向かう。ホテルに預けておいたスーツケースを受け取り屋外で荷物の仕分けを行い、12:40 ホテルを出発しテッサロニキ・マケドニア空港に向かう。テッサロニキはギリシャ第2の都市である。

フェリーターミナルに近い市街地の海岸にあるベネチア人の遺跡である円形の建物ホワイトタワーでバスから一時下車し、巨大なアレクサンダー大王の騎馬像のある広場に立ち寄る。この広場は海に面したロケーションの良いところで、美しい風景の中でしばしの散策を楽しんだ。バスに乗り市街地を抜けるとしばしでテッサロニキ・マケドニア空港に14:50に到着した。

クレタ島イラクリオ空港への搭乗手続きを済ませて17:35出発予定のフライトを待っていたところ天候が急変！たちまち雷雨(大雨)になり、空港はにわかにプールと化し、出発が大幅に遅れることになった。出発予定が立たず皆そちらをウロウロ未定の出発を待った。結局、この思わぬアクシデントでイラクリオン空港へは予定より3時間遅れで21:25到着となってしまった。空港にはクレタ島のガイドをしてくれる女性ガイドが待っていて、やっと22:15迎えのバスに乗り込み、アクソスという村のホテルに向かう。夜の道路を上ったり下ったりしてひたすら走り23:25ようやく目的のアルコンティコ・マニアス・ヤキントスホテルに到着。深夜に近い時間に豪華



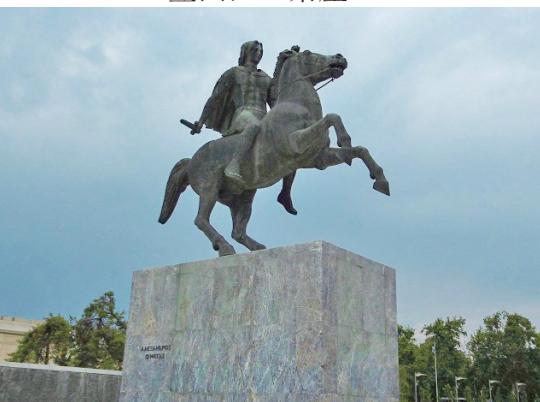
下山前的小屋での集合写真



下山前的小屋での集合写真



登山口の茶屋



アレクサンダーの像



クレタ島アクソス村のホテルでの遅い夕食



出発前のホテル風景

7月1日 吉永英明

イデ山登山

昨日のテッサロニキ空港出発の際の雷雨のため、クレタ島イラクリオン到着が大幅に遅れ、宿舎のあるアクソス到着が夜12時を過ぎていた。私にとっては眠気に車酔いが加わり、夕食は何を食べたのか判然としない状況で就寝となつたため、朝の目覚めも不調であった。

しかし、朝の天候は雲一つない快晴、オリーブの木越しに白い外壁が連なる傾斜地にひらけたアクソスの景観は登高意欲を呼び起すものであった。

朝食後、宿舎アルコンティコ・マニアスの車で標高1,400米の登山口へ。

北アルプスの太郎平からの北ノ俣岳を彷彿とさせる緩やかな山容である。北地中海東部の海洋性乾燥気候のため、喬木も見られない砂礫地が多く所々、羊、山羊が放牧され、残雪も見られる。ベルギー出身の女性ガイド、アリスの先導で残雪を避けながら約4時間、全員無事2,456Mの頂上に到着した。

ガイドは若いせいもあるうが、女性ながら息も切らせず軽やかに登っており、自分自身の年齢をつくづく考えさせられた。

頂上に着くころから次第にガスで視界が奪われたが、頂上にはゼウスの伝説を象徴する鐘が据えられており、各々、鐘を鳴らして昼食、時折視界が開ける景観を楽しんで下山にかかった。

再び宿舎の車で午後3時頃アクソスに到着し、シャワーを浴びたのち、アクソスのメイン・ストリート(と言つても数軒の茶店が点在する程度)を木陰でお茶を楽しむ地元の老人たちから声をかけられながら散策し、紀元前から人が住んでいたという歴史を感じつつ1日を終えた。

アクソスの村



イデ山トレイルヘッド



イデ山登山中放牧のヤギのあいさつを受ける



イデ山山頂



7月2日 (木) 横田昭夫

7月1日クレタ島のイデ山(2456 m)

に登頂し今回の山行活動は完了した。心配していた天候悪化はなくガスに包まれた程度であったので問題なく全員の登頂が果たせた。

今日から一転してクレタ島の観光で紀元前という途方もない過去の遺構を彷彿する。自国の財政問題でEUとの経済援助に揺れるギリシャもここクレタ島は別天地でATMに並ぶ人を見ることがなかった。エーゲ海に浮かぶクレタ島は東西260 km、南北の幅は広いところで60 km、狭いところで12 kmほどという細長い形状の島である。

面積は8,336m²で兵庫県とほぼ同じといわれている。ここクレタ島でヨーロッパにおける最初の文明の一つであるミノア文明(クレタ文明)が栄えた。この文明が栄えたことの要因は様々なことが考えられるところであるが、現地に行ってみて感じたことは、海路に恵まれていること、温暖な気候に恵まれ、年間雨量が少なく、住みやすい環境であったことが考えられる。7:30朝食、9:00集合写真を撮ってホテルよりバスで出発する。出発前にホテルのマダムより庭木について聞くと、桑の木はその昔シルクの生産が盛んであったなごりから家の周りに植えているとのこと。また、イデ山の登山口までの道路脇にも沢山あった赤茶色の種を付けた木は[アスフェダモス]といって4月に良い香りの花が咲くと云っていた。

レティムノンの港を一回りし、カラフルな市街地を通り抜け、坂を登るとフォルテツア城塞に至る。

この砦は海に面して建てられた大規模なものである。オスマントルコのクレタ島への攻撃が激しくなってきたことから1573年から建設を始め1580年に完成している。

12:00～13:30要塞を望む海岸の立派なレストラン・マイストロスで昼食を摂る。ギリシャは何処へ行っても食事のメニューはよく似ていて、毎回出てくるものにあまり替わり映えしないがここでは海産物のイカやタコそしてイワシのフライなどを食べた。次いでミノア文明の王宮群「クノッソス」「ファイストス」「マリア」「ザクロス」のうち、イラクリオンのクノッソス宮殿跡へ移動する。



フォルテツア要塞



出発前にホテル前で集合写真



クノッソス宮殿跡

ミノア文明について考えられていることと神話

クレタ島はヨーロッパにおける最初の文明の一つであるミノア文明が栄えた。当時の社会については、伝えられるべき文字が遺されなかつたため、遺構から類推するほかないが、平和で開放的であったと考えられている。ミノア期の遺跡には、壮麗な石の建築物や複数階の宮殿があり、排水設備や、女王のための浴場、水洗式トイレがあった。水力を動力とする仕組みに関する技術者の知識はとても高度なものであった。ミノア文明は、紀元前3000年頃からクノッソスが衰退した紀元前1400年頃まで栄えたと考えられている。この文明については「半牛半人の怪物ミノタウロスと迷宮の神話」また空を飛ぶ「ダイダロスとイカロスの神話」でも知られる。クレタの支配者ミノス王が神ポセイドンとの約束を守らずに呪いを受け、その妻から「半牛半人の怪物ミノタウロス」が生まれ、ミノスは困って、クノッソスに、入ったら決して出てくることのできない「迷宮」を作つてこのミノタウロスをそこにおいたという。そして支配していたギリシャ・アテナイから少年・少女を餌食として差し出させていたので、アテナイの王子セウスが乗り込んできて、迷宮の秘密を知つてアリアドネと恋仲になつてミノタウロスを退治し、一緒に出て行つてしまつたという。ミノスは、これは迷宮の出方の秘密を知る名工ダイダロスが秘密をばらしたということで、ダイダロスとその息子イカロスをこの迷宮に閉じこめたが二人は翼を作つて飛んで逃げてしまつたというわけであった。

14:50～16:00 クノッソス宮殿跡とミュージアムについて専門の英語ガイド・マリニナさんの説明を受ける。彼女は日本語を話さずすべて英語で話すので、その内容はよくわからないけれど、その話し方から誠実で、熱心にガイドをしていることが感じられた。クノッソス宮殿は紀元前3000年頃に始まり、紀元前18世紀～紀元前15世紀に栄華を誇つたクレタ文明中、紀元前18世紀頃ミノス王が建てた迷宮と考えられている。この宮殿は1900年イギリスの考古学者アーサー・エヴァンスにより発掘された。この宮殿は1辺が160mもあり、複雑で巨大な建物で4階建ての部分もあり、1200以上の部屋があったと考えられていること。ガイドの説明を聞きながら（言葉がよく理解できなかつたが）、足を運びつつ思ったことは、これほどの遺産がどうして「復元・複製」という形で手を加えられているかということだった。いかにもうさん臭くて、丁寧に説明を聞いてもその疑問が頭から離れなかつた。

16:50～18:00 ミュージアムに移動し、クノッソス宮殿の遺跡の出土品の説明を受ける。18:50～20:00 イラクリオン港のレストランにて夕食。全員一緒に摂るツアーファイナルとなる。ゆつたりと次から次に出てくるギリシャの料理を堪能する。そうこうするうちフェリーに乗船する時間となり、ガイドのアリスさんと別れ20:30 ブルースターフェリーのBlue Horizon号2万トンに乗船しアテネへ向かう。フェリーから望むイラクリオンの夜景を見おさめする。今夜は船中泊となり明朝アテネに着く。

7月3日 廣島孝子

楽しみにしていたギリシャ旅行もいよいよ終わりに近づく。

昨晩はフェリーの中、エンジンの音を子守唄にぐっすり眠り、警笛の音で目覚める。

甲板に向かうと廊下にはビア樽のような人が横になって寝ている。きっとここで一晩明かしたのであろうか？ 昨晩個室を用意されたが窓が無く不服を言っていた私達はまたまた反省！

外に出ると丁度真っ赤な太陽が昇る所であった。大海原が朝日をあびてキラキラと輝き、久しぶりにとても美しい景色に出会へ感激！！

アテネのピレウス港には豪華客船、クルーズ船、フェリー等で混雑している。6時30分接岸。7時、用意されていたバスに乗車し、ガイドさんの案内のもとアテネ市内に向かう。

車窓からはオリンピックの聖火台、バレーボールの球技場、等を眺めながら街に近づくと朝早くから銀行には長蛇の列が見受けられる。ギリシャに不況の嵐が吹き荒れている様子が唯一ここから伺えた。

間もなく目的のフィロパポスの丘へ、標高たつた150メートル程の登りであるが、まだ日の覚めやらぬ身体とすきつ腹にはしんどく感じる。

頂上には市民に慕われた古代ローマの執政官フィロパポスの記念碑があり、周りの岩山に溶け込んだアテネの街並みが360度見渡す事が出来、遠く南西側にはパルテノン神殿、反対側にはエーゲ海が望め、素晴らしい景観である。又、帰る途中、西洋哲学の祖と言われていたソクラテスの牢屋を見学、岩をくりぬいた結構大きな洞穴であった。

その後、又バスに乗車、市内のエルム通りにて待ちに待つ朝食とショッピング。

私達5人はホテルのラウンジに入る、まもなく満席。皆のんびりと優雅に朝食を楽しんでいる。国民性であろうか、ここにも財政不安での危機感は見受けられない。

私達おばんいやレディーはガイドさんの勧めで、チョコレートとオリーブ油などを買い求める。

「♪だんだん荷物は重くなり、重くなり♪」ルンルン気分で集合場所へ。

10時いよいよ空港を目指し最後となるバスに乗る。40分程でアテネ空港に到着。

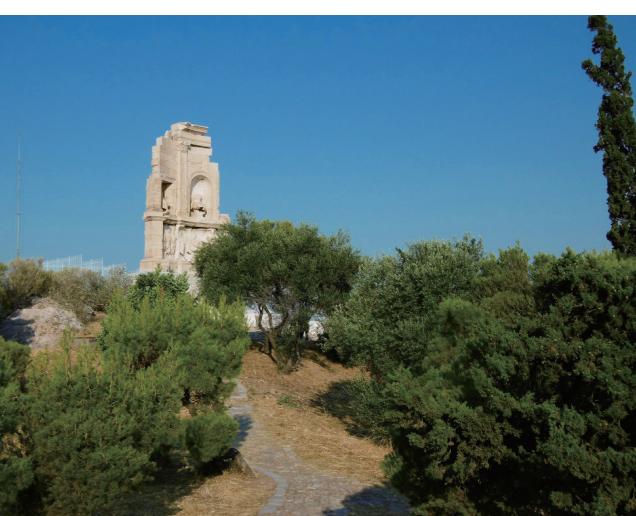
13時35分ギリシャにしては珍しくONタイム発、アムステルダムにて乗換、ここで仲間の2人のリッチマンと私の相棒はビジネスクラスに搭乗（るんるん）。私は「贅沢は敵」と何時ものエコノミーに席を取る。美味しい日本食の夢を見ながら帰国途上に・・・・



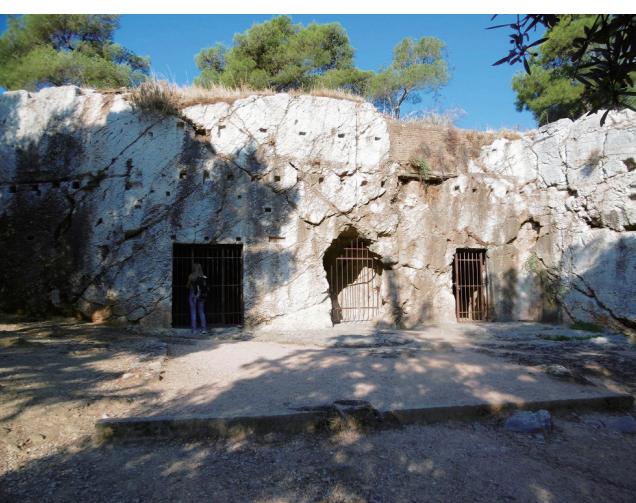
夜のフェリー



ピレウス港でひしめくフェリー



フィロパポスの丘



ソクラテスの牢獄

岩殿山と乾徳山

期日平成 27 年 6 月 8 日～9 日

参加者

石原達夫、横田昭夫、醍醐準一、川村光子、廣島孝子、西谷可江、武田鞠子、吉永英明

高橋聰、酒井 展弘、山村秀彦

此の山行は山想倶楽部の例会で決定した山行ではなく、ギリシャに行く前にどこかに足慣らしで行こうと廣島、武田の二人で企画したものに便乗したので有るが、特別山行として掲載することにしました。



6月8日

記：高橋 聰

5日の夜より毎年6月の第一日曜日に開催されるウエストン祭の手伝いで出かけて7日の夜23:00頃帰宅し寝たのが24:00過ぎていたので、今回の世話役より来ていた案内では、集合場所で有る大月には高尾で乗り替えて来いと書かれていたが、よく調べると数分遅れで大月に着く電車が新宿より9:30に出る列車があるのでそれに乗り、10:40頃大月に着くと既に岩殿山に行くメンバーである、石原達夫、横田昭夫、川村光子、廣島孝子、西谷可江、の皆さんは集合して僕の着くのを首を長くして待っていた。

此処より岩殿山登り口までは歩いて15～20分程度だ。横田さんの車は5人乗りなので一人余ってしまうので4人は歩いていくことにして、僕と横田さんで先に岩殿山入口に有る駐車場に先に行くことにする。先について用意していると間もなく歩き組も着いたので頂上に向かう。

駐車場より(11:00)アスファルトの歩道を歩いていくと直ぐに岩殿山入口と書かれている案内標識があり、コンクリートで固められた階段が続いている。20分程歩くとなんだか建物があり少し広い所に着く。よく見るとここは円山公園と書かれている、この円山山頂は標高が444.4と不思議に4の数字が並んでいる。この真下を中央道のトンネルが通っているようだ。天気が良い時はここより富士山が良く見えるらしいが、本日はあいにく曇天なので大月の町並みは俯瞰できるが、遠方は何も望遠する事が出来ず。

さらに階段は延々と続き岩殿山頂上と稚児落しの分岐点に着く、此処よりは後5分も歩くと頂上の筈だ。かなりきついが後少しだ頑張ろう。やがて岩殿城後に到着。ここが岩殿山かと思うが100メートル程先にパラボナアンテナがあり、その方がいくらか高い。先を歩いていた石原さんが帰ってきて、向こうが頂上だと言うのでパラボナアンテナ迄行く。頂上12:00着。木が生い茂り何も見えないので、直ぐに引き返し、城跡の本丸跡に有るベンチで昼食だ。

昼食を摂りながら雑談をしていると今回の世話役で有る廣島さんより、吉永さんと塩山で15:50頃の待ち合わせだと言うではないか、あまりゆっくりしていると大月駅で15:21か15:33に乗らなければ間に合わない。あまりゆっくりとしては居られないので、早々に昼食を終わらせて、歩き始めることにする。12:30

直ぐに稚児落しの分岐に着き、急な下り坂を20分程度歩き又登りとなり、いくつかの鎖場を通過し天神山に到着(13:20)やがて稚児落しに着き休憩(13:40)気温は高くないのだが、風も無く、蒸すので汗が肌着にまとわりついて気分が良くない。ここよりは天気が良いと道志山群が一望できるらしいが、本日は無理だ。又天気の良い時にでも来て見物するしよう。ここよりは急な下りが続き直ぐに民家が見えてきて、道路に出てしまった。駅まであと30分程度か、途中で石原、川村、廣島、西谷、の4人と別れて横田さんと初めに歩き始めた駐車場まで車を取りに行き(15:10着)後は今晚の宿で有る塩山荘に行くだけだ。塩山荘に着くと既に明日到着予定の山村さん以外は全員到着している。

指定された部屋に入ると、早速に風呂に入り本日の汗を流し取敢えずはビールで喉を潤おし、本日宿にて合流した吉永君、酒井君等と歓談している内に館内放送が流れて夕食だ。夕食は歓立表を見ると色々と書いてある。何かすごい料理が出てくるものと期待したらその通りで、女性陣はすべてを食べつくしていたが、男性達はどうしてもアルコールを摂取するので何人か

は食べ残していたようだ。この食堂は何故か19:30になると終了となり、話の続きを各自の部屋で下さいとの事、仕方ない部屋に帰ろう。

食事より帰ってきて外を見ると、グチャグチャと雨が降っている。明日はどうするか話があるが、取敢えず朝食を摂らないで乾徳山に行く予定で有ったが、キッチンと朝食を摂ってからどうするか考えることにして、各自眠りについた。

6月9日

朝目覚めて外を見ると依然として雨は降っている。今日の行動はどうしたものか。同室の横田さんはこれでは仕方がないので帰ると言うし、醍醐さんも一昨日は大菩薩に行き、昨日は金峰山に行ってきたので帰るかというので。僕も帰ることにする。

8:00に朝食の館内放送があったので、食堂に行こうとすると山村さんが到着して石原さんの部屋は何処と聞かれる。朝食後石原さんより乾徳山は中止して鶴冠山に行くこととしたと発表がある。これより帰宅すると言う横田さんと別れて9:30に宿を出て、鶴冠山に行く人は武田さん、山村さんの車にそれぞれ分乗する。鶴冠山の登山口である柳沢峠に向かい、此処で鶴冠山に行く人たちと別れて醍醐、高橋の二人はそのまま青梅街道を東京方面に向けて走って行った。

『此処からは石原達夫』

柳沢峠は35年前とは趣が変わり整備された大きな駐車場と立派なトイレがある。

ウロウロと身支度しているうちに観光バスが着きどっと人が降りてくる。見れば某ツアーカー社の黒川鶴冠山登山とある。このグループと一緒にしたら静かな山もやかましいことになると早々に出発する。

登山路は青梅街道から登るしょぼい階段から始まるがすぐ雨に濡れた笹の道となり、トップを歩く私はびしょ濡れかと思ったが、案ずることもなく間もなく道は整備された広いものとなる、ここでアッと驚く。なんと一面のササの先が黒と白の花が咲いているではないか。話には聞いていたが見るのは初めてだ。笹や竹の花が咲くと不吉なことが起こるとか、いや逆に吉兆だとか言われるようだが私は吉兆と見たい。何しろ40年から60年に1回咲くそうだから。

この辺りは樹林鑑賞の回遊路らしくよく見ればそのような道が縦横につけられている。天気は曇りのようで霧も出ているが、辺りは適当に大きいブナ、ナラ、イタヤカエデが、そのうちカラマツも現れ、すべて幻想的で美しい。たまにガラついたところもあるが整備された道を歩くうちにV字に戻る形で道が曲がるとなんと鶴冠山山頂という立木の凸部に出た。確か35年前に来た時は岩の道を登り、そのどんづまりの岩陵が山頂だった筈だったのだが。途中の岩道で当時5歳の私の娘が足を滑らせて2米くらい落ちて岩に抱かれるような形で止まり、みな慌てたことがあったけど。さらに戻る形で道をたどるとありました岩の山が、これが鶴冠山でしょう。その記憶の昔道は登ってきた道の延長上にあるようで、すでに木が生い茂って廃道のようだった。岩が出てきたので何とか面目を施し、ここで昼食とする。

楽しい昼食の後は一路柳沢峠に戻る。帰りの男性陣の車は山村さんのBMW車である。車内を泥靴で汚してはならないと新聞紙を敷いて乗車する、いい車は乗せてもらう側も気を使います。道路途中から見る富士山が見事だった。靈峰富士とはこのことだろうと思うほどの姿であった。また強アルカリ泉の塩山荘で汗を流し、塩山駅で解散した。

以上

個人山行

北アルプス 0m → 3000m
(親不知→焼岳) 縦走



山人

田谷八束／醍醐準一

船窓小屋とランプ

北アルプス 0m ~ 3000m(親不知～焼岳) 縦走

田矢八束

何時かは梅海新道から歩きたいと思いつつ先延ばしにしていたが、8月にはもう72歳になってしまふ。今行かないと来年は無理かもしれないと思い、今年実行する事にした。幸いにも醍醐準一さんがこの計画に乗ってくれたので、同行を依頼する。

7月28日(火曜) 午前中時雨後曇り

池袋駅東口の高速バス停留所を8:40に出発し、予定到着時間より少し早く直江津駅前に14:11に到着。ここで14:50発の泊駅行きに乗り換えて15:43に親不知駅に到着すると、連絡していた親不知観光ホテル(夕食・ナギリ11,000円)の車が既に迎えに来ていたので、すぐにその車に乗り16:00頃ホテルに着いた。

今回の山行目的は0mからだ。それを已に確認する為、ホテルの駐車場横から400段の階段を下り、海水に手を浸ける。ホテルに戻り入浴、今日より半月程は絶対に賞味する事が出来ない豪華な食事後、明日は早立ちの為20:30就寝。

7月29日(水曜) 曇

出発3:20 尻高山6:50 坂田峠7:30～8:00 白鳥山12:00～12:45 黄連山16:45 梅海山荘18:30(素泊り2,000円。毛布200円)

今日一日のコースは、かなりきついと思われるので、早朝まだ暗い中を出発する。登山口は宿の前の国道を渡った処だ。

いきなりの急登で始まったが、坂田峠迄は良い調子で早めに着いた(7:30～8:00)。ここからも急な直登、急な下りの連続で梅海山荘が見えた時はホットする。二人ともバテバテだ。しかし坂田峠から梅海山荘迄地図上の時間の倍の10時間もかかったとは。確かに歩くのは少し遅くなつたとはいえ、倍の時間も要するとは何故だろう。どうも二人とも納得が行かない今日一日の歩行であった。

7月30日(木曜) 一時雨後曇り

梅海山荘3:10 黒岩山7:30 朝日岳14:10 朝日小屋15:20(夕食・ナギリ9,500円)

昨日は予想以上に時間が掛かった為早めに出発する。足元がやっと見えるくらいの濃霧だ。5:00～10:00頃まで雨に降られる。黒岩山まで大した登りもなく意外に楽に行ける。しばらくして湿地帯となり広々とした気持ちの良い景色となる。さらに登ると見事なお花畠が続き、色とりどりの花が咲き乱れ、日ごろ花には縁のない僕達だが、此処では何故か立ち止まり、ゆっくりと心静かに花を眺めるのであった。朝日岳には予定の時間には着いたので、ゆっくりしても良かったのだが、朝日小屋の人に出来たら早めに着いて欲しいと言われていたのを思い出し早々に頂上を出て、朝日小屋には早めに到着したのだった。

7月31日(金曜) 晴れ

朝日小屋4:20 朝日岳5:25 雪倉岳10:45～11:00 三国境13:00 小蓮華山13:45～14:00 三国境14:45 白馬岳15:45 白馬山荘16:10(夕食・弁当9,500円)

巻き道を行かずに朝日岳に登る。ツバメ岩のトラバースはガレキの山だ。崩れたら逃れられないで急いで通過して、少し先まで行ってから休憩をする。目前には雪倉岳が聳え立っている。かなり長い登りである、気を引き締めてゆっくりと登り、雪倉岳の避難小屋を過ぎ、三国境に近づいた頃、醍醐さんに一寸小蓮華岳迄行って来たいのだがというと、どうぞ、どうぞとつてくれたので、醍醐さんは三国境より白馬小屋迄先に行って貰い、一人で三国境より小蓮華岳を往復する。白馬小屋についたら醍醐さんより、足を痛めてしまいこれから先を歩くのは厳しいので悪いが明日下山すると告知される。残念だが仕方ない。明日より一人で頑張ろう。

8月1日(土曜) 晴れ

出発4:50 杓子岳6:15 鐘ヶ岳7:15 天狗山荘8:15～8:30 不帰キレット11:05 唐松岳13:05 唐松頂上山荘13:25(夕食・ナギリ10,800円)

今日から一人歩きだ。醍醐さんは足の不調で、本日は大雪渓から降りるとの事なので、先に出発する事にする。昨日迄は醍醐さんの後に付いていたので暫くの間、なんだカリズムが可笑しい。天気は良く右手に剣岳、立山、五色ヶ原、薬師岳が雄大な姿を見せてくれていてその絶景が素晴らしい、非常に気持ちが良い。

だが天狗の頭より唐松岳迄は、鎖場、梯子、狭く険しい岩場、不帰のキレット等を通るので気の抜けないコースだったが、一人歩きの為か、かなりのスピードでそれらを抜けることが出来、唐松岳頂上山荘に早く着いたので、明日からのコースに対して、体をゆっくりと休めることが出来た。

8月2日(日曜) 晴れ

出発5:00 五竜岳8:05～8:20 キレット小屋11:30～12:00 鹿島槍ヶ岳北峰13:25 南峰14:30 冷池山荘16:15(夕食・弁当9,500円)

今日も天気が良く剣岳から薬師岳の景色がよく見える。しかしコースは八峰キレットを通る為、昨日同様に険しい岩場コースを通過することになる。

当初の予定では本日はキレット小屋に泊まる予定であったが、昼前に着いてしまったので、少し無理をして冷池山荘迄足を延ばした。

8月3日(月曜) 晴れ

出発4:05 種池山荘6:15～6:35 新越山荘9:00 鳴沢岳10:00 赤沢岳10:55～11:25 スバリ岳13:40 針ノ木岳14:35 針ノ木小屋15:20(夕食・ナギリ9,200円)

今日は気が楽なコースだ。只スバリ岳の登りはガレ場だが、大きい岩、小さい岩、砂が混じつた細かい石等、色々大きさの違うガレ場コースなので注意が必要だ。気を付けながらゆっくりと登る。景色は今日もよく見えるが、昨日までとは違ってきた。剣岳が右後方になり、立山が

近くなり大きく見える。又右下には黒部湖が見え、白い遊覧船が小さく見える。針ノ木小屋に着く20分くらい前に、雨が少しばらついたが、無事に針ノ木小屋に着く事が出来た。

8月4日(火曜) 晴れ

出発6:30 蓮華岳7:45 蓮華のコル9:00～9:15 北葛岳10:20 七倉岳12:20 船窪小屋12:35(夕食・オギギリ9,200円)

今日は船窪小屋迄だ。どんなに急いでもその先の鳥帽子小屋には到着できない。ゆっくりと行くことにして、今回山行中唯一の朝食を食べてから出発する事にする。今日の楽しみは、白いコマクサを見る事が出来るかどうかである。蓮華岳の下りでは下降路の左側方に気を付けてゆっくりと歩いていたら100m程下った左側の方にかなり大きな株で2株程認められたので、念願が叶ったような気持ちとなりホットだったのであった。本日もカンカン照りだ。熱中症に気を付けて水分をこまめに摂取する。船窪小屋には昼頃に着いたので、カレーライスをお願いした後は、ゆっくりと休息だ。

8月5日(水曜) 晴れ

出発4:40 船窪岳5:45 不動岳9:30～9:45 南沢岳11:25～11:50 鳥帽子岳13:05 鳥帽子小屋13:55(夕食・弁当9,500円)

以前山想俱楽部で石原さん、広島さん達と来た時は鳥帽子小屋迄かなりの時間を要したと思ったので、早めに出発する事にした。今日も日中は日差しが強く不動岳迄かなりきつい感じだったが、鳥帽子の二重稜線迄来ると鳥帽子小屋迄快適なハイキングコースである。

早めに出発したおかげで早めに着く事が出来たので、小屋に着いたら今日もカレーを食べたいと思い頼んだら、本日の分はもう売り切れだとのこと。仕方ないカップラーメンを頼んで昼食とした。16:00～17:00にかけて雷神の鬨の声と共に激しいスコールだ。早く出かけ、又雲の様子を見て早く小屋に着くようにしたので、雨に濡れる事が無く助かった。

8月6日(木曜) 晴れ後曇り

出発5:00 野口五郎岳8:10～8:30 真砂岳9:10 南真砂岳10:10～10:20 東沢乗越13:10 水晶小屋13:50(夕食・弁当9,000円)

今日も暑くなりそうだ。野口五郎岳の先で巡視員に会い、行き先を聞かれたので南真砂岳に行くと言ったら、丁寧に真砂岳経由の近道を教えてくれた。真砂岳には標識はあったが、南真砂岳には何も無くなく、ただケルンが積んであつただけで、他には高いところは無いようなので、このケルンが積んである処がそうなのだろうと思いながら、水晶小屋に向かうのであった。

8月7日(金曜) 晴れ後曇り一時雨

出発3:00 鷲羽岳4:50～5:10 三俣山荘6:05 分岐(巻道)6:55 双六小屋8:30～9:05 弓折岳10:35 抜戸岳13:50 笠ヶ岳山荘15:35(頂上往復)(夕食・弁当9,000円)

今日は笠ヶ岳迄だ。かなりの長丁場を覚悟して行かなければならぬ。恐らく12時間以上掛

かるだろう。まだ漆黒のなか、水晶小屋を出て上空を見ると、檻櫻屋の天井に穴が開いているようで、星の輝きがとても綺麗だ。鷲羽岳の頂上には大勢の人が立っている。何だろうと考えるも、日の出の時間と重なっているので、御来光を見る人たちだ。三俣山荘からは三俣岳には行かないで巻道を行く事にして、双六小屋へ向かい、双六小屋で大休止だ。

双六小屋から笠ヶ岳迄は直ぐ其処に見えているのだが、なかなか着かない。途中雷鳥の親子4羽が登山道の脇で砂遊びをしていたので、休憩がてら砂遊びを見ながら、終わる迄ゆっくりと休む。弓折岳近辺で雨がパラついて来たが、すぐ止んだので助かる。笠ヶ岳の手前の水場で水を補給し山荘に向かうが急な岩場の登りが有り、なかなか近づかない。やっとの思いで山荘に到着。今夜の宿泊の受付を済ませたら、明日行くのはつらいので、靴を脱ぐ前に笠ヶ岳の頂上を往復する。

8月8日(土曜) 晴れ後曇

出発3:15 秩父平5:50 弓折岳7:40 双六小屋9:05～9:35 横沢岳10:16 硫黄乗越11:00 千丈乗越13:45 槍ヶ岳山荘15:10(頂上往復)(夕食・弁当9,500円)

今日も早く出る。双六小屋迄も長いが、その後今日は槍ヶ岳迄行くのだ。進行方向の右手にはシルエットで槍～穂高の稜線が黒い壁のように綺麗に見える。双六小屋で大休止しこれから先の長い西鎌尾根の登りに備える。西鎌尾根の登りはゆっくりと小休止を度々取り乍ら登る。槍ヶ岳山荘が見えているのだが、なかなか近くならない。我慢我慢もう少しだと心の中で気合を入れて足元を見ながらゆっくりと進んでいると、目の前に山荘の壁が飛び込んで来た。すぐに宿泊の手続きを済ませて槍ヶ岳の頂上を往復する。頂上は大勢の人が登っていて満員状態だ。早々に頂上を後にする。

8月9日(日曜) 晴れ

出発3:40 中岳4:55 南岳6:10 長谷川ピ-ク8:00 北穂小屋9:40～10:15 潤沢岳13:00 穂高岳山荘13:40(夕食・弁当9,500円)

今日のルートは岩場の気の抜けない危険なコースである。早く出たのはゆっくりと行く為だ。右手には昨日歩いた笠ヶ岳～双六迄の稜線が陽に輝いて綺麗に見える。

難所のキレットを過ぎ、北穂高小屋迄の登りは鎖場での待ちもなく無事に到着だ。然しこの後潤沢岳の手前で、岩に掴まっていた右手が滑って体勢を崩した時に左頬を岩にぶつけてしまい、裂傷を負ってかなり顔が腫れてしまった。穂高岳山荘に岐阜大学医学部診療所が有ったので診察して貰った処、目には異常は無いという事なので、ほっとすると同時に、後二日で今回の目的である日本海は親不知の0メートルより焼岳迄の縦走が完遂出来るので、登山を続行する事とする。

8月10日(月曜) 晴れ後曇り

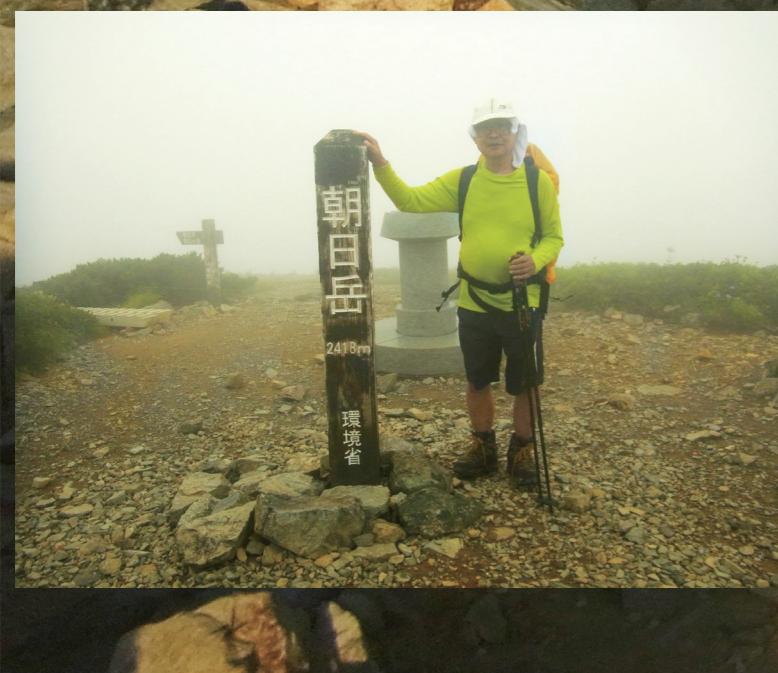
出発4:30 奥穂高岳5:30 ジャンダルム7:15 天狗のコル8:40 西穂高岳12:05～12:20 西穂独標14:00 西穂山荘15:00(夕食・弁当9,500円)

今日も西穂高山荘までの気の抜けない危険な岩場コースだ。ゆっくりと登ろうと早めに出た心算が、4:30では早く無かった。山荘より奥穂高岳への登り口の梯子段の処から既に団子状態だ。お陰?でゆっくりと登ることが出来たが、奥穂高岳より先で前にいた8人パーティを見ていたら、なんとこのうち半数がこのような岩場が未経験らしく、簡単な何でも無いような岩場でも、手や足の置き方を指導して貰い乍ら下っていたので、自然とのんびりと行くことになり、独標迄このパーティの後ろをゆっくりと歩いたのだった。このパーティは独標より先のルートはなんでもない下り道なので、かなり良い足取りで歩んでいた。西穂山荘にはちょうど良い時間に着き、山荘の入り口に『本日は布団一人に付き一枚です』の表示有り。今日は今回の山行で最後の山荘泊りだ、両隣の人に遠慮しないで、思い切り手足を伸ばして寝られる、嬉しいかぎりだ。

8月11日(火曜) 晴れ後曇り

出発 5:00 新中尾峠 8:50 烧岳北峰 9:55 ~ 10:20 中の湯温泉 12:50 ~ 14:15 中の湯発 14:53 松本駅発 16:58 新宿駅着 19:33 津田沼駅 20:38 自宅着 21:15

今日で登山開始から14日目で最終日だ。なんだか気が緩んだのか膝がガクガクで下り路はストックを頼りに下る。中尾峠迄4時間近くかかってしまったのだ。だが焼岳迄何とか登り、



焼岳の標識にタッチした瞬間、今回の山行は天候にも恵まれ無事完遂出来た喜びが湧き上がつてくると同時に、なんとなくほっとする。中の湯で2週間ぶりの風呂に入り、髪を剃り、さっぱりとしてバス停へ。松本までバスは直行だ。松本よりスーパー梓で新宿へ、津田沼の駅前の食堂でカツライスを食べて自宅に帰り、自分の部屋に入りザックを下してやっと今回の登山が終了だ。ある人に言わせれば自宅に帰ってからザックや靴の手入れを済ませ、持って行った物を全て綺麗にして、又直ぐに行けるようにして全てが終わりなのだよと言っていたが、そこまで言わなくとも無事に自宅に帰って来た事で良しとしよう。

(今回山行中の食事は夕食は山小屋で頂戴したが、朝食は山小屋では食べずに、携行していた物か山小屋で頼んだオニギリや弁当等を食べていました。昼食は朝食と同様か山小屋で食事があればそれを頂いていました。文中にもあるように山小屋で朝食を頂いたのは針ノ木小屋で頂いただけです)



室堂から太郎平・折立の縦走



一ノ越と雄山

石原達夫

期日 8月2日から6日まで

参加者 吉永英明、廣島孝子、酒井展弘、西谷可江、石原達夫

8月2日

8月初めは地元小・中学校恒例の集団立山登山があるそうで、そのため室堂はおろか天狗原、弥陀ヶ原のすべて宿泊設備は満杯である。折角予約した宿も先方の手違いで違う日となっており、間際で宿を探す羽目になった。無駄を承知でほとんどすべての宿に電話したがやはり駄目だった。仕方なくウエブで立山駅付近の宿を探すとスキー場の宿、ホワイトベルが見つかった。やれやれである。

東京を9:44発の北陸新幹線“はくたか”に乗車する。自由席しかなかったので万全を期して50分以上ホームで待ったが、東京駅では発車間際でも座れる程度だった。しかし大宮では通路に立つ人が見られる混み方になった。長野を過ぎると空席がだいぶ目立つようになり上越妙高を過ぎるとほとんどガラガラになった。だ北陸方面の観光開拓は不十分だということがわかる。道理で金沢行きは1時間あたり“かがやき”1本、“はくたか”1本のわずか2本しかなく、これでは大金をかけて造った北陸新幹線は無駄使いだといわれても仕方あるまい。

12時近くに富山駅に着く。1時前に京都から参加の酒井さんを待ち、新しい駅ビルにある食堂で白エビ天丼を食べる。なかなか美味しい。3時近い地鉄に乗り立山駅到着、明日のケーブルの時間や切符の買い方を聞き、宿からの迎えの車に乗り今日の宿ホワイトベルに着く。スキー場の前に位置している温泉付き宿だ。

ここの温泉はアルカリ泉、露天風呂もあるが夕方はアブが出るから注意とのこと。夕食もよかったです。

8月3日

朝はほとんど起き抜けで5:40宿の車で立山駅に送ってもらう。すでにケーブルの切符売り場は行列である。6:00切符売り場がオープンし6:40発のケーブルの乗車券を買うことが出来た。待つ間に外のベンチに座り、昨日買ったます寿司を半分食べ朝食とする。ケーブルに乗れば後は順調にすすみ8時ころ室堂バス停に着く。広場の湧水を水筒に入れ、諸々の準備を済ませて8:30頃から歩き始める。



まずまずの好天気、一の越へのメインストリートから分かれて室堂山に向かう通路をとる。以前はゴロゴロ道だったのがよく手入れされた石畳みの道となっていた。室堂山の展望台への道から分かれ山道に入りすぐ雪田を渡りるとガレ場の急登となる。登り切って浄土山、続く竜王岳に出れば雄山の展望が開ける。よく見れば一の越から御山に登る多くの人々が確認できる。鬼岳、獅子岳の間には3か所ほど雪渓の上部を通過する所があるが、別に問題はない。早い時期だと軽アイゼンがあった方がよいといわれるところだ。

獅子岳からザラ峠までは400米下ることになるが、この辺りから霧が昇ってくるようになり風も出て涼しい。いやらしいガラガラ路を下っていくとライチョウが私たちを待っていて、しばらく先導してくれる。立山カルデラ側は崩壊が相当に進みそのうち登山路も付け替える必要がありそうだ。ライチョウが出れば雨というごとく、ザラ峠を過ぎるころから雨がポツポツ降り出してきた。空を見れば東側は晴れ間もありすぐ止むだろうとたかをくくっていたが、そのうち濡れるようになり先ずザックカバーを付け、ついに雨具を着ることになる。意地が悪いもので雨は止む。雨具は着たまま乾かす。五色が原小屋の見えてきたところで生乾きの雨具を外しザックにしまい込み小屋に着く。小屋では個室をあてがわれ、やることがないので、5時の夕食までゆっくりと飲みながら時間を過ごす。夕食後はすぐに寝る。7時頃だろう。ここトイレはペーパーも流せる水洗式で快適だ。

8月4日

朝食5時なので6時には出発する。天気予報では3時頃には雨ということなのでその前にスゴ乗越の小屋に着きたい。地図帳を見るとコースタイムがまちまちでどれが適切なのかわからない。朝の五色が原は気持ちよい。鳶岳の登りからは、朝もやで少しほんやりした後立山連峰や昨日越してきたかつい獅子岳、とがった鬼岳が見える。ここからはお花畠でいろいろな高山植物が見える。越中沢岳までは朝の勢いでどんどん上る。スゴの頭との鞍部まで何と3時間半。地図帳では越中沢岳まで4時間とある。このくだりで反対側から登ってきた登山者にライチョウ親子がいると教えられる。登山路のわきに2~3羽の子を連れた母鳥がいた。鞍部からスゴの頭までは200米に満たない登りだが急でくたびれる。スゴ乗越の下りがまた急だ。スゴ乗越の先は樹林帯となり先ほどまで見えていた赤い小さな小屋はみえなくなる。黒部渓谷を挟んだ対岸には烏帽子岳、南沢岳が見え、さらにどでかい赤牛岳が聳えている。あまり早く小屋に着くと「まだ夕暮れまでは十分時間があるから薬師小屋まで行きなさい」といわれる可能性があるのでゆっくりしたいところだが、振り返ると昨晩五色が原小屋に泊まっていた34名と23名の大団体がスゴの頭からわざわざと下って来る、この連中に先を越されて小屋に入られたらえらいことになると早々に小屋に着く。小屋には吉永さんの知人の勝山さんが働いていたがこの人数では特別待遇は望むべくもない。夕食4時半、朝食4時半ということだ。酒井さんの機転で2階ベランダにテーブルといすを確保し夕食を待った。下の前庭のベンチでは団体さんがラーメンを作り始めていたが夕立になってしまって大騒ぎだった。

さて寝場所だが、当初布団1枚に2人といわれ驚いたが、寝るころには布団2枚に3人程度に緩和された。しかし寝るときは隣同士が頭と足を互い違いにした。夕食を食べたら寝るしかない。6時前には、寝たと思う。



8月5日

昨夜は窮屈で熟睡は出来なかったが、朝方には逆に疲れが出たためか目が覚めない。時計を見ると4時17分、これは大変だと飛び起きる。デジタル時計の見間違えで実際は4時7分だったがともかく手を洗い食堂に行く。昨日の五色が原小屋より幾分ましな食事だ。5時半には小屋を出立する。勝山さんには太郎平小屋での個室確保をお願いする。

まずはなだらかに見える間山の登りから始まるが、登山路は直登するので、見た目ほど楽な登りではない。大体室堂から来る人たちは同じ小屋に泊まり、同じ時間に小屋を出るため、お互い抜きつ抜かれつでだんだん顔見知りとなる。

この辺りも一面のお花畠だが花の種類が変わってきている。間山山頂手前の池のある所で休む。

テント泊りの若いカップルが母親と思しき女性とともに先行していたが、いきなり荷物を放り出し走って下って来る。小屋に忘れ物があるとか。間山を越えると薬師岳山頂が見えてくる。振り返れば雄山が一段と立派に見える。剣岳も見えるが雄山の方が威厳がある。そうかそれで雄山なのか、と納得する。此処からの北薬師岳の登りがきつい、黒部側にガレたところを慎重に越すと、後は単調な登りが続き、やっと北薬師山頂に着く。山頂は人が多いので少し下がったところで休む。わがパーティの女性はここが薬師岳山頂と思っていたらしく、なんで写真を撮らないのかといわれる。ここから一旦下り、次いで登りとなる。



薬師岳の手前、間山の登り

雄大な金作谷カールを見ながら小1時間で薬師岳山頂に至る。忘れ物を取りに戻ったカップル+1名はいつの間にか私たちに追いつき、追い越して行った。若いというのは素晴らしいとわが老人組は羨ましがる。

山頂では当然大休止、山頂のお堂には古い薬師さんと金ぴかの薬師さんが鎮座している。さてここから先は下り一方だ。愛知大事件の恨みの北東稜の頭を過ぎると、天水だけに頼った、しかし立派な薬師岳小屋の横を通り抜ける。登山路が緩い尾根道から谷あいに入るところにある水場で冷たい湧水を飲み、しばらくぶりに顔を洗う。谷とも道とも言えないところを下ると薬師峠のすっきりしたテント場に出る。これを過ぎて一登り、目の前に現れた太郎平小屋に向かう。部屋は残念ながら個室にはならなかったが大部屋の隅に1人布団1枚で場所をあてがわれる。残りは山形からの30人くらいの団体が占めていたが、この団体は圧倒的に女性が多い。夕食後部屋で話をしていたらうるさいと苦情を言われ早いけど7時10分ごろ電気を消して寝た。

8月6日

朝食5時、余計な水も捨てて身軽になり6時下山開始、下りはなんだかんだ言っていても速い。大学が夏休みに入ったためか合宿に入る学生のパーティがいくつも登ってくる。テントを持った単独登山の若い女性も目立つ。休みながら降りても9時前に折立バス停に着く。

急げば8:30のバスに間に合っただろう。次のバスは10:45発なので待ち時間がありすぎる。幸い5人乗りのタクシーが空いているというのでタクシーに乗る。昨日確認しておいた亀谷温泉の白樺ハイツという日帰り温泉に寄ってもらう。この温泉は軽々しい名前だが、しっかりした温泉ホテルで、温泉場もなかなかよく、しかも1人610円と安い。温泉は10時オープンなので少し待ち、ゆっくり入って11時には乗ってきたタクシーで富山まで送ってもらう。これで1人3800円、多分パブリックの交通機関と比べてそれほど高くないと思う。富山駅では来た時に寄った駅ビルで回転寿司屋に入り豪華に昼食。いや山小屋の食事と比較しての話だ。

酒井さんを除いた4人は12:55発のはくたかに乗車する。この列車は長野を過ぎると大宮までノンストップで16:28には東京に着く。これにて5日間の山旅は終了、解散と相成った。平均年齢74.5歳の皆さん、よく歩きました。

以上



70の爺さん二人 アルプス漫歩

読売新道～雲の平～薬師岳～剣岳～大日岳

山人
田谷八束／醍醐準一



田谷八束

8月の梅海新道に続き、今歩いておきたいルートの読売新道～剣岳へ前回と同じメンバーの醍醐準一さんと行って来た。

9月9日(水)雨

新宿高速バスターミナル 23:00 扇沢 5:05

台風18号の影響で当初の予定より2日遅れて雨の中を出発。

9月10日(木)曇

扇沢 7:30 黒部ダム 7:46 遊覧船乗り場 9:30 奥黒部ヒュッテ専用船着き場 10:15～10:25 奥黒部ヒュッテ
12:00

扇沢に着いた時は、雨も上がり本日から天気も良くなりそうだ。今日は醍醐さんの仲間の口利きで奥黒部ヒュッテ専用のボートに乗せて貰う事が出来、平の渡し迄のいやらしい湖畔を歩かなくて済み大助かりだ。ボートは遊覧船乗り場を9:30に出発。水面近くからの景色を十分に堪能し奥黒部ヒュッテ専用の船着き場に到着する。この船着き場は平の渡しの船着き場よりもかなり奥になる。ここからのコースは起伏が有り、皮を剥いだ丸太の梯子や、木で作られている階段がつるつると滑りそうで慎重になる。奥黒部ヒュッテには昼には到着、夕食前に風呂に入つて下さいとの声が有り、思いもかけず風呂を御馳走になる。明日は早立ちの為 19:30には就寝。

9月11日(金)霧

出発3:50 赤牛岳 12:00～12:25 温泉沢の頭 15:20 水晶岳 17:10 水晶小屋 18:10

今日は長く厳しい登りのコースだ。気持ちを引き締めて早めの出発とする。赤牛岳の頂上迄の標識が、下から1/8,2/8,3/8,4/8,5/8,6/8,7/8と8等分されており、登りだけの長い尾根なので、只々根気が必要である。他のコースで一般的には危険と言われる、急登、鎖場、梯子等が一杯詰まっている。8時間程懸かって、なんとか頂上に着いた。これから歩んで行く前方を眺めると、今から行く水晶岳迄は、今までの苦しかった登りの事を考えると、楽な稜線漫歩だ。16:40頃西側の空が急に晴れてブロッケン現象を見る事が出来、ブロッケン現象が見られたすぐ脇の岩場に沿って、虹が出ている事に醍醐さんが気付く。なんと虹のアーチの発生元である。すぐ目の前で虹の橋の元が見られるとは何と言う感激か言葉に表すことが出来ない。二人共今までの人生でもそうだが、この後の人生でも見る事が出来ないであろう現象に感激して、只々見とれるのみだ。残念乍ら感激のあまり写真を撮る事を忘れてしまったのである。この後水晶小屋には、今日一日の長い行動に猛烈に疲れ、右手の稜線に夕日が沈んで行くのを見ながら、ふらふらになりながら水晶小屋に18:10に着いたのでした。

9月12日(土)晴

出発5:00 岩苔乗越 5:40 祖父岳 6:20 雲の平キャンプ場分岐 8:00～8:30 アラカ庭園 9:20 薬師沢小屋 11:50～12:30 左股分岐 14:00 太郎平小屋 15:35

今日は薬師岳山荘の予定だったが、前日の長行動に体が疲れ果てているようなので、とにかく太郎平小屋を目指して歩きだす。『水晶小屋～三俣方面へのルートは先月の梅海新道より焼岳迄行った時に歩いているので、雲の平経由のルートだ』祖父岳の手前で今シーズン初となる霜柱発見。かなり冷え込んでいる。祖父岳の頂上から雲の平を一望する。雲の平のキャンプ場で水を補給して、雲の平山荘を通り過ぎ、薬師沢に下る。この薬師沢への下りの路は大きな石が重なった急な下りで、しかも苔が濡れていて物凄く滑りやすい、時間を掛けて慎重に下った。薬師沢小屋の傍で昼食として、緩い登りが続く東股出会いに向って進み、太郎平小屋迄3時間程の一頑張りをして、何とか太郎平小屋に辿り着いた。

9月13日(日)濃霧～強風～雨

出発6:15 薬師岳山荘 8:05 薬師岳 9:05～9:15 間山 12:25 スゴ乗越小屋 13:35

太郎平小屋を出発した時は、風をそれほど肌に感じなかったのだが、登るにつれ徐々に風が強くなってくる。途中で休憩したので、薬師岳山荘には寄らず通過。風がいよいよ強くなり、稜線では強風が吹き荒び体を持って行かれそうになるのでストックで体を支えながら、確りと足元を確認して歩く。薬師岳の頂上で少し休み、強風に注意しながら前進するのみだ。間山を過ぎ、少しして下りに掛かると前方に赤い屋根の小屋らしき物が見えホットしたが、小舎迄はかなり時間を費やし到着した。小屋到着後14:00過ぎ頃から雨が降り出たので、雨の前に小屋に入っていたので大助かりだ。夕方醍醐さんが受付の前を通った時に太郎平との連絡で、醍

醐という二人組が着いているかと確認していたとの事だ。山小屋の人達は何気なく登山者を送りだしているようだが、年齢、気象条件、コースにより気にかけている事が解った。有難い事である。

9月14日(月)晴

出発6:17 スゴの頭 8:05 越中沢岳 10:35～10:50 鳶山 12:45 五色ヶ原小屋 13:25

朝食後直ぐに出発。小屋の前のテーブルやイスが霜で真っ白になっている。木道にも霜が真っ白に付着していて非常に滑りやすい。スゴの頭は頂上近く迄岩場の急な登りだ。登り切ったら目の前には越中沢岳が聳えている。一寸下ったかと思うと直ぐに登りになり、まだ時間も十分に有るのでゆっくりと登る。この越中沢岳より鳶山間はたいした事は無いなと思っていたのだが、鳶山が近づくにつれて高度感が増して来た。此処もゆっくりだ。鳶山の山頂からは、眼下に残雪と広々とした五色ヶ原の景色が広がり気持ちが良い。今日泊まる五色ヶ原山荘はこの五色ヶ原の真ん中に位置している。

9月15日(火)晴

出発6:00 ザラ峠 6:35 獅子岳 7:55～8:10 室堂山 11:10～11:25 立山室堂山荘 12:10

ザラ峠迄は、ほゞ下りだ。朝一番なのでんびりと草原の中を歩く。ザラ峠～獅子岳を見ると見上げる程高く、かなり苦戦を強いられるかと思ったのだが、まだ歩き初めで疲れも無い為か、コースタイム通りに歩く事が出来た。室堂山と一の越の分岐迄は、鬼岳と龍王岳を巻いて、岩場とガレ場のミックスのルートを登りながら到着。此処で一休み後、室堂山に向かうが、地元ではこの室堂山をカルデラ展望台と呼んでいるようだった。カルデラや後方に聳えている槍ヶ岳を望遠後、室堂に向かう。日本最古と言われている山小屋の横を通り、隣の立山室堂山荘が本日の我々の宿だ。食堂で昼食後温泉に入る。奥黒部ヒュッテ以来の風呂で実に気持ちが良い。時間もあるが部屋に戻り後4日ある事を考え、体力の回復の為にのんびりと過ごす。

9月16日(水)曇

出発7:00 一ノ越山荘 7:50 雄山 9:00～9～9:15 大汝山 9:40 真砂岳 10:40 別山 11:45 剣山荘 13:40

本日の行動は剣山荘までの予定だ。通常なら剣山荘に行くには雷鳥沢経由の方が時間は相当に短縮出来るのだろうが、ここから剣岳本峰へ行き剣山荘へ帰ってくるのは厳しいので、少し大回りになるが一ノ越から立山を通って行く事にする。雄山ではヘリコプターの荷降ろしの為通行止めとなり暫く待たされる。立山では一番標高が高い大汝山を通り越し、富士ノ折立を下がった近辺より何故か登山道が歩き易くなつて来た。真砂岳、別山等の頂上には確りと立ち、別山の頂上よりは明日登る剣岳の頂上が大きく聳え立つてお、明日の登攀意欲が盛り上げられる。剣御前小舎より剣山荘迄は剣御前への別山尾根と剣沢に降りるルートの中間にあるトランバースルートを歩いたが、ガレ場と岩屑のミックスで歩き難し。山荘でシャワー。2日続きの沐浴は快適で疲れもどこかに行ってしまう。

9月17日(木)雨

出発6:20 一服剣 6:50 前剣 8:00 剣岳 10:00～10:10 前剣 11:50 一服剣 12:10 剣山荘 12:50

今日は雨予報だったので、起きた時は降っていなかったので喜んでいたのだが、朝食が終わり外を見ると残念、なんだか少し濡れている。出発時には雨も少し強くなってきたようだが、此処で待機していても仕方ないので、出発する事にする。一服剣迄の道中も足元の岩や鎖がかなり滑りやすい。気を付けて行こう。この先には前剣やカニのタテバイ等危険個所が連続しているので充分に気を引き締める。剣岳のテッパンに辿り付き少し休んだが、雨も降っているので体が冷えない内に下る事にする。鎖場や岩場の部分は登りよりも下りの方がより注意が必要で、今日は雨の為、鎖を持つ手や足場が滑り易いく、余計な力が入る。前剣辺りより雨、風も強くなつて來たので緊張が高まるが、一服剣を過ぎて最後の鎖場が終わると、ほっとして気が緩み、何故だか寒気を感じたのだった。

9月18日(金)晴後霧

出発5:25 剣御前小舎 7:20 新室堂乗越 8:25 奥大日岳 10:40～11:10 中大日岳 12:50 大日小屋 13:00

この剣山荘より剣御前に向かうコースは3通りあるが、トラバースルートは一昨日歩いたので、

剣沢コースを行く事とする。剣沢小屋迄は下りで楽だったが、小屋を過ぎると比較的緩い登りとなり、最後は急な登りとなっていたのだが、割りと楽に御前小舎に着くことが出来た。これより奥大日に向かうのだが、室堂乗越よりは立山～一の越～浄土山～国見山～天狗山に囲まれている室堂全体が良く見えて、とても素晴らしい景色だ。又地獄谷の噴煙の吹き出し音も良く聞こえ、紅葉も既に始まっている。奥大日より剣岳を見る事を楽しみにしていたが、10:00頃より霧が出て来たので望みが断ち切られてしまう。誠に残念だ。大きな岩がある七福園を通過すると程無く大日小屋だ。今日はまだかなり早いが、此処に泊まるので小屋に荷物を預け大日岳迄往復する。夕食は17:30からとの事で、時間になって食堂に行くと、其処には沢山のランプが吊られており、ランプの明かりの下で食べる食事の雰囲気も素晴らしい。

9月19日(土)雨後曇

出発4:30 大日平小屋 7:15～7:40 牛ノ首 8:35 登山口 9:30 称名バス停留所着 9:45 立山駅着 10:35 電鉄富山着 13:16 東京駅着 17:12

今日は一般にはシルバーウィークの初日である、帰路の交通機関の混雑が心配だ。濃霧の中を出発する。まだ暗くてヘッドランプの明かりを頼りに、濡れて滑る岩に注意しながら、転ばないように慎重に下ったので、大日平小屋迄時間が掛かった。休憩後は予定の時間通りに下ることが出来、登山口には9:30に着き、バス停には9:45着だ。バスに乗ってから運転手さんに立山駅の傍でどこか風呂に入れないかと聞いたら、千寿荘を教えてくれたので、そこで風呂に入り、この10日間の汗と埃をすっかり洗い清めて、富山駅を経由し、北陸新幹線で東京駅には17:12に着き、東京駅でこの10日間の相棒と別れて帰宅した。



期日 2015年10月25日

参加者 L・平井、石原、関口、大塚、寺田夫妻、廣島、西谷夫妻、川村、小亀

朝9時、塩山駅集合。少し寒かったけれど雲一つない青空です。ここで平井さんから拡大コピーされた地図を頂きました。

前日に金峰山に登った寺田夫妻と、車で来られる大塚さんとは大弛峠で落ち合うという事で、8人でバスに乗車、道が狭いとかでバスも10人乗りの小型です。

途中は紅葉の真っ盛り、カラマツやカエデがとてもきれい、その上、少し雪を頂いた富士山が裾広がりのシルエットを見せ、金峰山も間近に見えて、最高の景色です。柳平でマイクロバスに乗り換え10時40分大弛峠に到着、既に大塚さんと寺田さん夫妻もいらしていて、11時に全員そろって出発です。

最初は森林の中を行きますが、途中からは木の階段や木道が延々と続くよく整備された登山道です。道々、富士山や金峰山、南アルプス、八ヶ岳の絶景に感激、間もなく前国師を経て国師岳に到着、風が強くじっとしていると寒かったです。

頂上付近の風を避けた所で富士山を見ながらの昼食です。

1時出発、来た道を戻ります。三繁平分岐から風の強い北奥仙丈岳を往復し、その後、夢の庭園を通って大弛峠へ下る。夢の庭園の景色は素晴らしいが、大きな岩がゴロゴロして歩きにくいものでした。

大弛峠からの帰路は、バス会社と廣島さん、平井さんの交渉の結果、予定よりかなり早い3時過ぎに塩山行きのマイクロバスに乗ることが出来ました。おまけにバスは往路とは別の経路を走ってください、運転手さんはその間いろいろと説明してくださいました。

一日中天気に恵まれ富士山と紅葉を堪能した山行でした。



紅葉を求めて

奥秩父 国師ヶ岳、北奥千丈岳



嵯 峨 野 路 の 紅 葉 山 行

石岡慎介・記

木々の錦秋に目と心を奪われる季節がまた巡ってきた。紅葉と清流が織りなす秋麗を迎えると、人はどんなに時代が変わっても、とりこになるようだ。

“山の錦は、まだしう侍りけり。野べの色こそ、盛りに侍りけり”（源氏物語）

時折山茶花つゆの気配もあったが、京の都では、汗ばむような紅葉狩りである。市内は国際色豊かな雑踏にもまれた嵯峨野路であるが、一旦お山に入れば、山想人にとって、たっぷり静かな秋興に浸る世界が待っていた。

知立と京都在住会員のお蔭で、古都の文化、修験の里山を存分に楽しんだ2泊3日である。企画者の縁の下の力持ちにはまずもって感謝一杯である。

入念に準備された企画の足取りは次の通りである

11月19日 東京発8:03 = 京都着10:47 = 嵯峨嵐山着集合11:39…《小倉山登山・嵯峨野散策》…ペンションマインドゲーム泊

11月20日 ペンション発…《愛宕山上山》…嵯峨水尾…柚子の里割烹『直八』宴会…保津駅=嵯峨嵐山…コミュニティー嵯峨野泊

11月21日 ホテル発…トロッコ嵯峨駅=《嵯峨野鉄道》=トロッコ亀岡駅=バス移動=保津川乗船場～《川下り》～嵐山昼食～嵯峨嵐山駅=バス移動=京都駅解散

渡月橋を渡って保津川ぞいの出口のほうに「東海自然歩道」を進む。嵐山公園をしばし散策すると、万葉集と古今集の立て札がそこそこにあり王朝文化の華をPRしている。前者は「ますらおぶり」、後者は「たおやめぶり」を詠っている指摘は“そうだったかな”の心象である。

“山川に風のかけたるしがらみは流れもめげぬ紅葉なりけり”

の秋興詠に気づいたが、何と紅葉黄落を「しがらみ」と述べるが、川の流れを堰き止める形容となっている。

さて最初の登高目標としている標高293mの「嵯峨小倉山」は嵐山の対岸に位置し、里山ハイク向きである。平安貴族から現代人にも脈々と伝わり愛し続けられる紅葉狩りの感性舞台なのである。“ご当地へ天皇様が清遊されるまで、紅葉葉に心があれば散らないでほしい”とまで純朴な心根を詠う小倉百人一首を知らない岳徒はいないだろう。

“小倉山峰のもみじ葉こころあらばいまひとたびの御幸またなむ”

嵯峨野には、剣劇俳優大河内伝次郎の山荘とか政商角倉了以の木造があるとか聞く。嵯峨野庶民の慈母とか呼ばれた勤王志士の母「村岡局」の胸像だけは拝顔した。読めない漢字で「盗らないでください」とサインもあり、何事と思いきや、川中にはホタルの餌になるカワニナが生息していると誰かが教えてくれた。

ソヨゴの赤い実が照り映えて美しい見晴らし台で小休止。京都岳人の景観説明を受ける。桂川にかかる渡月橋を見下ろし、南東に大文字山、比叡山、さらに京都産業の雄京セラのビルも一望できた。淀川として大合流する桂川、保津川の河川治水など堰堤歴史を専門岳徒にも学ぶ。帰郷後少し復習したが、17世紀になって嵐山の豪商角倉了以が取り組んだ水路土木開発、明治に入ってお雇い外人デレーベによるオランダ堰堤事業の話を初めて山上で傾聴した。

2時15分頃頂上に出たが、リョウブやヤマモモの林である。リョウブの表皮は殆ど鹿の食害痕があった。早々に退散すると結構大木が伐採されている。

よく見ると「カシノナガキクイムシ」にやられたコナラの燻蒸除去の現場であった。京都森林組合による自然保護活動は大変そうである。山道は砂岩、泥岩なのか崩れやすい古生層土壤のようで道普請のご苦労が偲ばれた。

下山してまた一般観光客の中にまぎれ込む。名高い《竹林の小径》に入る。

膨大な労力をかけたと思われる竹林管理は圧巻で、古竹は全くという程伐採し、100%近い青竹林は壮観としか喻えようもない景観である。京都岳人の配慮で、縁結びの神、源氏物語の野宮神社、平家物語の祇王寺、わび住まいの寂光院、二尊院、檀倫寺、去来の落柿舎など歩き回ったが、門構え拝観だけの時間／経費の節約指向があまりに強かった。昔から山採り赤紅葉は好んで寺社庭園に移植されているはずなので、中に入れば紅葉女神“龍田姫”は一段と艶やかだったろう。

その昔、京の中心街が華やかな『洛内』とすれば、嵯峨野一帯は静かな、どこか寂しさの漂いが感じられたが、この田園郊外は『洛外』となるのだろうか。

印象深かったのは、“神は父、仏は母”の神仏習合が全盛だった王朝信仰の証なのか、第52代嵯峨天皇の檀倫皇后さまゆかりの「檀倫寺」である。仏教への信仰が篤く、日本最初の禅院を創建されたという説明があった。調べ付け加えるなら皇后ご本名嘉知子さまは藤原摶関家に対抗した没落橘家の美貌救世主だったようで、記憶されてもよい方だろう。“美しき者、高貴な者も世は無常”と申されたとか、人は誰でも己の時を迎えるが、ここでは記述できない程の烈女の死に様が杉本苑子小説の題材にもなっていた。それはさて置き、毎夜お通された嵯峨天皇への御歌が残っている。



小倉山から見る保津川



嵯峨の風景

《 メッチャ噂になっていますから チョットの間外で待ってくださいその間についていた夜露は後で私がキレイにしてさしあげますよって・・・・ 》
と帰郷後だが、迷訣相聞歌に気づいた。一方この天皇さまは高野山をこよなく愛した空海との相思敬愛で知られ、壮大な寺社仏閣の建立につながる名君であったようだ。

山行二日目は、京都西北に聳える標高 924m の岩盤のような愛宕山を目指す。

『お伊勢へ七旅、熊野へ三旅、愛宕さんへは月参り』

という古歌がある。7 時には出発し、12 時半には休憩処「柚子の里」に下りてきたが、上り降り 5 時間ほどかかった本格的な山歩きであった。22000 歩くらいだったか。

愛宕山は、全国 900 余の御分社の総本宮で 1300 年前役小角によって山嶺が開かれ、火伏の神、戦勝の神、王城鎮護の神を祀る信仰の山となっている。愛宕とはどんな由来の言葉か神官と語り合う。記紀神話によれば、カゲツチノミコトはイザナミノミコトとイザナギノミコトの間に生まれた最後の息子だが、母親のイザナギを火災で死に追いやったことから父神に殺される仇子転じて=阿多古、愛宕と呼ばれるようになり火防の神、火山噴火の神の総称となったという。そういうえば鎮火、防火を司る神は、愛宕神社では、“火廻要慎”と書き “火の用心”と唱える拍子木風習もあり少し肯ける。カチカチ山の火打石ではないが、京都は嵯峨石、愛宕石、清滝石、鴨川石など硯原石、研ぎ石が山中に産するらしい。



愛宕山山頂付近



愛宕神社



柚の里

頂上には 2000 回とか 3000 回とか頑張り登頂する現代山愛好家の記録も披瀝されていた。東の比叡山 (848m) が火の山であれば、愛宕が火伏の山だと申されたのは月輪寺の女官であった。大正 14 年の石塔があり、“つらくとも、こらえて登れ皆の衆！！”と彫られていた。古寺守って母娘三代とか女官殿は、「昔は人の命にやさしかったが、今の下界は自分本位で自分の欲望、榮華のみ求めている」と慨嘆されていた。開いた口元から南無阿弥陀仏の六仏を吐き出している空也上人の彫像も所蔵しているというが、空也追っかけの白洲正子女史が愛したお寺だとも気づいた。登山者とは言わず、“上山者”の皆さんへという呼びかけ標識もあったが、祈り願いの山らしい。永代常夜灯には江戸時代の寛永、宝永、元禄、明和などと彫られていたが、寄進者の京の都人にとっては、戦乱大火が多かった歴史に思いをいたし、防火の願掛けだったのだろうか。全燈籠に火をともす『愛宕火』は風物詩となっているようだ。

火伏の神花『檣』の花売り里女の写真紹介も見た。上山者は“おのぼりやす”下山者には“おくだりやす”の京挨拶は昔日の美しき日本なのだろうが、柚子 真っ盛りの里におりてくると、風情豊かな割烹で温かい歓迎が待っていた。柚子風呂と豪華な地鶏鍋に地酒と大いに舌鼓を打った。



水炊き料理

“山里の 湯に熟れ重し 柚子の肌”（石 講岳）

その夜部屋で疲れを癒していたら、北の海理事長の帰天が突然報ぜられ、その昔、憎たらしくほど強かった大横綱にお悔やみとなった。行年 62 歳だった。いよいよ最終日。山歩きから解放され、物見遊散の日である。

9 時過ぎにトロッコ電車に乗る。眼下に保津峡を見下ろしながら、嵯峨→亀岡間全長 7 キロ、30 分ほど山嶺谷合を一周する。鬼面車掌がタイ女性たちにフォトサービスしながら「日中友好！」と声張り上げてはみたが、そうとは知らない彼女らキャーキャー嬌声をあげていた。久しぶりの都上りだが、時を経て、この国らしい文化の壁を越え、世界の絆として受け容れられる新開国がはじまったようである。兎にも角にも仰天の異人ラッシュである。

バスに乗り継ぎ今度は川下りである。両岸にはカルガモや鳥が羽を休める中、30 人ほど搭載の遊覧船は 3 人の船頭さんによって力一杯にあやつられる。16 キロ程の川下りは緩流と急流を繰り返し 2 時間弱の行程だが、愛宕山が進行方向に聳えたり、後方に回り込んだり、河川工学者によれば、山間の穿流蛇行による地形上の秘跡のなせる技のことだった。

奇岩には清和天皇の鵜飼いの場とか、屏風岩、いのしし岩、かえる岩などたくさん表示があるが、この地域特産の北山杉が 40 年ほどの樹齢だろうか、次世代へ向け青々としていた。地図上では第 56 代清和源氏の棟梁となられた天皇山陵が水尾保津川沿いにあるようだ。この川下りの歴史は古く、400 年前、政商角倉了以が丹波の木材、薪炭を京の都へ運ぶ産業水路として切り拓いたという。今となっては観光産業が地元経済をどれほどか潤しているか初見参であった。

巧みな竿さばきに身をまかせ、時に激流の飛沫を浴びながらスリル満点である。仲間の能弁娘と船頭との語らいが他の乗船客の笑いを呼んでいたが、一句献上したくなつた。

“天高し 遊びをせんとや、生まれけむ”（石 講岳）

11 時半下船し山行と遊覧の旅は幕となった。

こうして、平成 27 年四季折々の山人生も終盤を迎えてきたが、人はあるがままの大自然の息遣いにどれほど支えられていることか、1300 年前からの雅の京文化がこの日、この空、この山仲間たちの中で、どれ程深く生きづいているか悟る山旅であった。

“ほどほどに 老いて紅葉の 山歩き”（能村登四郎）

参加者：武田、酒井、西谷夫妻、廣島、日出平、醍醐、石原、石岡



トロッコ列車



保津川下り

忘年山行

記：醍醐純一

日時：2015年12月12日（土）～12月13日（日）

場所：12日 青梅線古里駅より丹三郎尾根～御嶽山～山楽荘泊

13日 山楽荘～日の出山～梅の木峠～マルドッケ～琴平神社～澤ノ井ままごと屋～沢井駅

参加者：石原達夫、石岡慎介、小亀真知子、高橋聰、武田鞠子、寺田正夫、寺田美代子、日出平洋太郎、廣島孝子、醍醐準一

12月12日（土曜）

今回の忘年山行は9:40に青梅線の青梅駅に集合し、石原代表が世話人となり開催された。後発の武田、高橋の両名を除き他の参加者は全員集合したので、古里駅に向かう。

古里駅で下車し、丹三郎尾根登山口に向かい、大塚山登山口より獣害対策用の金網のゲートを空けて入山する。12:05に丹三郎尾根のシンボルとなっている飯森杉に着く。この杉の初代目は落雷で焼失した為、現代の樹は二代目でその樹齢は百数十年になるという。

13:00に大塚山頂上に到着。陽だまりの中、太陽の恵みを体一杯に感じながら、気持ち良くゆっくりと昼食だ。13:55御嶽神社に向けて出発し、14:45に神社に到着し、ここで先行していた武田さん、高橋さんの二人と合流。彼らは時間も充分にあったので、宝物殿をゆっくりと時間をかけて見物していたようだ。本日は徳川吉宗も閲覧したといわれる、国宝に指定されている平安時代末期の制作で源平の武将畠山重忠奉納の赤糸緘大鎧、鎌倉時代に製作され、一具一揃が完全に遺存している軍陣の鞍や、重要文化財の紫裾濃甲冑等の鎧兜や、同時期に作成された刀剣等も陳列されているというので、拝見する事にする。

ちらほらと咲いている寒桜を愛でながら、15:20には山楽荘に到着。部屋に入ると、風呂に入れるというので早速に入浴、その後は持参の物で喉の渇きを潤すのみだ。まだ食事前だ、あまり潤しすぎて、酔ってしまってはいけないので、少しだけにしよう。

18:00より夕食タイムだが、いつもの通り宿のご主人【御嶽神社の権宜も兼職】による神社などの由来や、御膳の上に乗っている食材等の講釈を聞きながら、楽しい宴会の時間を過ごす。『又今回体調不良で参加されなかった西谷さんより沢山の差し入れを戴き感謝です』



日の出山

12月13日（日曜）

朝食後9:00に宿を出発する。なんだか本日の天候ははっきりとしない、一日持てば良いのだが、昼過ぎから、天から涙が落ちてきそうだ。日の出山には予定通り10:00には到着する。遠方は霞んでいるが景色は素晴らしい。今の処天気は大丈夫のようだ。

梅の木峠を越えて三室山へ、別名マルドッケと言われている岩山である。そこを迂回して琴平神社前を通って下山していたら、途中で樵の衆に会ったので、何をしているのと聞いたら、かねてより栽培していた、椎茸栽培用の原木を切り出しているとの事で、ちなみにナメコの原木には桜が一番との事だった。八幡神社に12:30に先頭部隊は着いたが、暫らく待っていても後続がなかなか来ないので、石原さんが心配して見に行くと、樹林の間より何とか現れる。なんだかここに着いた途端雨もチラチラ落ちてきた。傘を持っている人は傘をさして、また傘を持って来なかつた人はそれなりに雨支度をして本日の昼食予定場所である、沢井駅の傍にあり、多摩の銘酒である酒蔵の小澤酒造が経営している、澤ノ井のままごと屋に向かう。道中に吉川英治記念館があるので、それを見る予定だったが、なぜか本日は閉館で有った。二俣尾駅の近くに来ると石岡氏が本日夕方より他用があるというので、ここで石岡氏と別れ、あとの9人はこの青梅線の電車は一時間に2本位しかないので、沢井迄歩いても大した事は無いと思い歩いて行ったが、二俣尾～沢井の駅迄は後で調べると3キロ近く有り、かなりの時間を費やして、最後の人は何とか、ままごと屋に14:30には着く事が出来た。このままごと屋の料理は豆腐懐石がメインで有ったが、お酒を嗜む人にも、又全く下戸の人達も夫々楽しく料理を頂いたようであった。天気は二日とも、まあまあの日和にしておきましょう。沢の井駅で解散皆さまお疲れ様でした。



左、大塚山



右、三室山近辺の歩行

スノーコンペ



ユアーズイン前で集合写真

記：高橋 聰

期日 2月6(土)～8日(月)

参加者 酒井展弘、横田昭夫、菊池武昭、石原達夫、醍醐準一、下河辺史郎、田谷八束、小亀真知子、高橋聰、武田鞆子

2月6日

下河辺君が車で行くと云うので僕の自宅迄7:30に迎えに来て貰い出発だ。

目白通りを順調に走り、関越に入るとなんだか混んでいる。鶴ヶ島近辺まで混んでいるようだ。案内には鶴ヶ島迄一時間必要と書いてある。三芳を過ぎた辺りで右側に事故で車が止まっていた。これが原因だったようだが、少し行くとまた渋滞だ。

今度は鶴ヶ島迄の自然渋滞らしい。だがそれも大したことなく進み、妙高高原インターに11:20に着いた。駅前の蕎麦屋で蕎麦でも食べるかと妙高高原駅に行くと予定していた蕎麦屋は空き地になっていて何もなし。仕方ないので他の処で食べてから宿に向かい、宿に着いたら、酒井君が新幹線で先ほど上越妙高駅について、バスで妙高スキー場迄行くので、そこに迎えに来て欲しいと電話が有ったと宿の主人である小笠原君が言っているので、酒井君が来るのを待つ事にする。

二人でゆっくりとスキーに行く支度をしているうちに酒井君も着いたので、三人で赤倉スキー場へ、本日の雪は新雪なので滑りやすい筈だが、なんだかごろごろとした雪だまりがあるのと同時に、雪も重くて滑り難い。おまけに雪と共に風も吹いて前方が良く見えない。それでも4時近くまで滑って小笠原君に迎えに来て貰い宿に帰ったら、明日来る予定の石原さん以外は既に集合している。横田さんは杉の原で一人で滑ってきたと言っていた。

田谷、武田の両名は14:00頃宿につきコーヒーを飲んでいると、醍醐、子亀の両氏も着いたようで、スキー組が帰ってきた直ぐ後に菊池君も到着した。

いつもであるがこのユアーズインの食事は美味しい。

2月7日

朝起きたら風雪共に強くどうにも動きが取れそうもない。リフトやゴンドラは動い

ているようだが、これではスキーに行っても視界不良なので、滑りに行ったとしても、他人とぶつかって怪我をしてもつまらない。またウォーキング組もこの吹雪状態では全く歩く気がしないようだ。朝食後なんとなく、全員何もすることが無いので、手持ち無沙汰でゴロゴロしている。

11時頃小笠原君の発案で車で30～40分程度で行ける中野の名物そばを、全員で食べに行く事にする。黒姫のトンネルを過ぎたら雪も止んで来た。俳人の小林一茶の旧跡の横を通り蕎麦屋に着く頃には雪も止んで青空も見えてきた。

この蕎麦屋には前に一度小笠原君に連れて来て貰った事があるが、味は良いのだが、なんといつもその量が多い、以前に来た時は一人一人ではなく、何人前と注文すると大きなざるで山盛りの蕎麦が出てきたが、今はスタイルが変わり一人一人のざるで出てくるようだ。

それでも出てきたものを見ると普通の大盛り2杯分くらい有り、食べきれなさそうだ。食べ残してもいけないので、みんな黙々と食べている。味は良いので何とか全員食べきって蕎麦でお腹が満腹になるなんて初めてだと騒いでいた。

午後からは下河辺と酒井の両名は折角スキーに来たのだからと、スキーに出かけたが、15:00頃に石原さんも到着、これで今回参加者が全員揃った事になる。

16:00頃孫娘を連れて杉の原に来ていた広島君が顔を出して、明日は孫の中学入学の面接があるとか何とか云っていたが、子亀君の車に同乗して帰って行った。

本日の料理は昨日は洋食だったので、和食だ。それもたっぷりとあり、なかなか食べきれない。皆お昼に蕎麦を食べ過ぎたせいでなかなか箸が進まないようだ、それでもいつも通り和やかな話の中で、全員がほぼ食べきっていた。本日のお酒は黒姫高原駅の傍にある酒屋で貰った来たお酒だが中々いいける。（此処まで高橋担当）

2月8日

今日でこのスノーコンペも3日目だ。眞に天気が良い。この妙高高原には何回も来ているが、こんな良い天気は初めてだ、空を仰ぎ見ても雲ひとつない。当初本日は戸隠に行く予定だったが、予定を変更してスキー組の5名は妙高スキー場にスキーを楽しみに行き、石原さんは昨日来たので、本日は一日スキーを楽しみユアーズインに宿泊するようだ。武田さんが体の具合が悪いと早々に帰って行ってしまった。

ウォーキング組（菊池、醍醐、田谷）は池の平スキー場へ行き10時頃より小笠原さんの案内で歩き始め、まずは目の前の小川を涉り杉林の中に入る。15分位で杉林を抜けると、広々とした全く踏み後の痕跡が無い雪原が現れて、実に気持ちが良い。ここはゴルフ場との事だ。ここより緩い登りの先にクラブハウスがあり、そこに11:00頃着いた。ここから見る妙高山も素晴らしい眺めだ。

ここで少し休んで池の平に戻るのだが、杉林の中で日差しの合間をひらひらと落ちて来る雪片が光に当たり、ダイヤモンドダストのように輝いて眞に綺麗だ。スノーシューで雪の上を歩く感触をたっぷりと楽しみ、池の平には12:00頃戻る。昼食は本格的な美味しい中華料理店で済ませ宿に戻る。その後、僕と醍醐さんは風呂に入り帰り支度をしていると、スキー組も帰ってきた。その後、夫々帰宅したので有った。（この日の担当稿は田谷）

Cortina d'Ampezzo

例会山行
ドロミテ・コルチナダンペツツオのスキー

コルティーナ・ダンペツツオは、イタリア共和国ヴェネト州ベッルーノ県にある、人口約5900人の基礎自治体。ドロミーティ山脈の麓、アンペツツオ地方の中心地であり、登山やウィンタースポーツの拠点となるリゾート地である。1956年には、この町を中心に冬季オリンピックが行われた。[ウイキペディア](#)



セラロンダこの山を一周挑んだメンバー



コルチナダンペツツオ・スキー場



セラロンダの途中

記：石原達夫

今年の海外スキーは2月20日から30日まで、イタリアの北部ドロミテに位置するコルチナダンペツツオに滞在し、ドロミテ山群でスキーを楽しんだ

参加者 石原達夫(総括) 廣島孝子、酒井展弘、石原泰子、鳴原孟志、後藤早登
山田功(添乗ガイド)

コルチナダンペツツオはベニスから車で2時間程度のドライブで到着する比較的アプローチの良い町で、1956年第7回冬季オリンピックが開催され、トニー・ザイラーの史上初の三冠王と、猪谷千春の回転で銀メダル獲得とで話題となった。

旅程は空路ローマに行き、乗り換えてベニス空港に到着。初日は遅いのでベニスに泊る。

21日はベニス観光で、ホテルのバスでローマ広場に行き、ここからは運河を走る水上バスでサン・マルコ寺院に着く。寺院を拝観し、リアルト橋に至りここで昼食とする。午後は水上バスで移動し、アカデミア美術館を見学した。その後、水上バス、ホテルバスでホテルに戻り、チャーターの専用ミニバスに乗り込みコルチナダンペツツオに向かう。

コルチナのホテル・ポンテキエサは中心街から少し離れている三ツ星のホテルだがなかなか居心地が良い。朝食は、ふんだんに取りそろえたバイキングスタイル、夕食は毎回アペタイザーとアントレはセレクションのできるフルコースであった。

コルチナから直接行ける主要なスキー場は2ヶ所あり、いずれも街外れのゴンドラに乗ることから始まる。

1.は宿から歩いて行けるところにあるトファーナ行きゴンドラに乗り、途中乗り換えてトファーナ・ディメゾ 3244 M山頂下のラ・バレスに出る。いきなり放り出されたらビビるような急斜面だらけである。ここから西に一段下がったところの上部がオリンピックコースのポメダス 2303 Mで、峠とした岩壁に両側を囲まれた急な廊下のようなコースである。下部は街に近い駐車場までつながる長く緩いファミリー向け斜面になっている。

スキー1日目の22日はこのトファーナ上部の急斜面とポメダスのオリンピックコースで滑った。また最後の日の27日は、またここに来たが生憎と濃霧で1800M以上は視野がほとんどなかつたのでポメダスの下部の緩い斜面でスキーを楽しんだ。

2.は宿から少しスキー循環バスに乗って着くフローリア行きゴンドラで、着いたところがフローリアのゲレンデになり、目の前はTバーリフトもある適当な斜度のゲレンデである。私たちはその先の急なリフトで上がるフォンディ峰 2360M から始まる急斜面で滑る。あたり一帯はドロミテの屹立した岩峰群に囲まれた素晴らしい斜面である。この先、水平リフトから道路を渡った先にあるクリスタロ峰 3216M の懐から登るソンフォルカの峡谷は上部ルンゼ状の急な谷で、シルベスター・スターローンの映画クリフハンガーの場面になった所とかで、わくわくしてこの狭い峡谷を滑った。私たちはスキー2日目の23日と26日にこのフローリアコースのフルメニューを滑った。

24日は私たちのメイン・イベントのドロミテ名物セラロンダ一周コースに挑んだ。

ホテルから専用ミニバスで山道を走ること約70分で目的地の出発地点に到着する。ガイドは国際山岳ガイドでもある大男のマニエルさんで、彼のリードでスタート地点のアラッパから数多くのゴンドラ、リフトを乗り継ぎ、セラロンダの雄大な山塊を眺めつつ右回りで6つの峠を越して効率よく一周した。前半はスタミナを消耗する急斜面が続く。丁度半周のセラ峠にある隠れ家的なロッジのカルロ・バレンティにてゆっくりと昼食をとる。午後は比較的楽なコースとなり、4時過ぎ出発点のアラッパに戻った。このコースは昼食以外休みなく滑り、ガイドなしではとても日没までにはゴールインしないマラソン・コースであった。

25日は再びマニエルさんのガイドで、昨日のセラロンダに行く途中のファルツアレゴ峠が出発点だ。峠の駐車場からゴンドラでいきなり目前の岩山、ラガツオーラ 2778M に登る。山頂には第1次大戦時の要塞跡があり山小屋もある。私たちの今日の滑降はこの山頂から始まる。右手の大きな岩峰群を眺めながら下るコースは基本的に氷河で、コース脇の岩壁には氷瀑が懸かっている。スリリングな氷河を抜けると、ゆったりとしたセントロフォンダ村 1650M に出る。約1000Mの標高差を滑ったことになるがこの間ほとんど休みなし。ドロミテのスキーは実に体力を要する。ここからは何と馬車の曳くロープにつかまり平地を行く。サンカシアーノ村の上部にあるゲレンデはゆるくて比較的短いリフトが集まっている長閑なファミリースキー場だ。このゲレンデを過ぎ、ペドラセス村はリフト乗り継ぎで通過し、さらにリフト2段で上がった先には信仰を集める教会施設がある。この下のやはり隠れ家的なレストランのリー・パディア・ロッジで少し遅い昼食となる。午後はサンカシアーノ村のゲレンデを滑り抜け、昨日行ったセラロンダ方面に近いプラロンギア峠でスキーを終了する。ここからはミニバスでファレツアレゴ峠に戻り、マニエルさんに別れを告げる。

途中、バスの運転手さんの好意で街を望む丘に建つ第一次大戦の忠霊塔に寄らせてもらう。

27日は早めにスキーを切り上げ、街に買い物に出たが、主要な店は16時頃からの開店なので待ち時間があった。ホテルでは夕食前に1室を借り切り、皆で最後のお茶会で楽しんだ。

28日朝6時にはホテルを出る。皮肉なもので昨夕からの雪は30cmほどに積もっていた。

総評 今年のドロミテはガイドも驚く雪の少なさである。従って雪崩の危険はないが、雪面はカリカリに固まっているところがほとんどだ。しかし毎晩2~3cm積もる新雪が多少の緩衝材になり、エッジが全く効かないということはなかった。

ヨーロッパのスキー場は、その規模の大きさと、目を奪われる山岳風景で圧倒される。少々贅沢だが年に1度はこういうところでスキーをしたいと思う。それにしても今年のメンバーはやる気満々、シニアにしては気力、体力が十分な強力なパーティであったので、予期した以上に存分に滑ることが出来た。

以上

日光白根山登山



日光白根山下山中

期 日 2016年3月22日（火）～23日（水）

参加者 C L石原達夫、高橋聰、吉永英明、醍醐純一、西谷隆亘、西谷可江、横田昭夫

記録

3月22日（火）快晴

石原車、高橋車、横田車の3台で片品温泉 プチホテル・たいむ に集合。

動性高気圧に覆われ雲一つない好天気、途中の道すがら山々がよく見えた。

今年は何処も雪が少ない。浅間などほんの少し申し訳程度に残っている。

妙義山、赤城山、榛名山辺りには全く雪が見られない。遠く、日光、武尊、谷川方面に雪を頂いた山が望めた。

3月23日（水）曇り時々小雪

7:40分宿出発、8:05 丸沼高原、8:40 日光白根山ロープウェー山頂駅を出発。

ここから正面に山頂を望めるのだが今日はガスの中。平坦な樹林帯のコースを歩く。

七色平分岐と呼ばれる平らなところで、アイゼンを付ける。この辺りから急斜面が出てくるのでアイゼンを付けると歩きやすい。

コースは山腹を北から南巻きながら登っている。本日のロープウェーの運行は、ロープウェーの点検により午後2時までなので、午前11時を以て登行をやめ下山する。2450m付近。

あいにくの天気で山頂付近はガスの中で展望もきかない状態だったので、林間の雪上歩行（アイゼンワーク）で十分だった。 12:30 山頂駅、13:00 丸沼高原、14:20 片品村鎌田の『村の産物屋 かたしなや』 のそばに舌鼓を打ち散会した。

記：横田昭夫

山想俱楽部新年会



飯田橋「かくや」にて

記：高橋 聰

日 時：平成28年1月13日（水）午後6時～8時50分

場 所：飯田橋「かくや」

出席者：吉永、高橋、石原、森、田谷、醍醐、菊池、小亀、日出平、大塚、西谷夫妻
寺田夫妻、川村、広島、川井、下河辺

いつもの通り高橋 聰の司会により定刻を少し過ぎた18:05分頃より始まり、乾杯の前に本年前半に実施予定している山行で、2月実施予定のスノーコンペ、2月末実施のイタリーロドミテ山地の中腹に位置するコルチナダンペツツォーで実施するスキー行、同じく3月末実施予定の日光白根、4月予定の御在所と鎧岳兜岳、5月連休の直後9.10で土樽の清水部落より、新緑と残雪を楽しみながら、旧国道の清水峠を越えて、谷川岳の土合まで散策。6月実施予定の米国のグランドティトン及びイエローストーンの山旅の計画を石原代表より説明があり、日本山岳会前会長の森武昭さんの乾杯で非常に和やかに実施され20:50分にお開きとなった。

森武昭さん挨拶要旨

山想俱楽部の皆様明けましておめでとうございます。

今年もどうぞ宜しくお願い致します。

私はご存知の通り、ここ数年の間日本山岳会の理事をしており。この山想クラブの新年会と理事会の日程が重複していましたので、出席することができませんでしたが、昨年理事の任期を持って退任致しましたので、これからはさらに山想クラブの皆様と共に、山に親しめるのではないかと思っています。

又皆様と共に山に行った時は、楽しい山歩きが出来ましたら幸いです。

最近の川づくり

文=西谷隆亘

（自然環境と川）

人間から見た「自然環境」の構成は地形・地質要素（大地；山岳・河川 etc.）と水（水循環）、大気とそれらによって養われる生態系（植物相+動物相）である。これら総てが、生態系の一員である人間の環境である。

太陽エネルギーにより海洋面から大気中に蒸発した水蒸気が雲になり、雲は風により陸地に運ばれ、雨となって大地に降り、大部分は河川を通って、再び海に帰り、水は地球上を循環している。これを水循環と呼ぶ。水は、途中で、大地を侵蝕し、土砂礫を運搬しながら、動・植物の命を養い、生態系が維持されている。大地を移動する、適正な水量と水質が生態系を含めた、人間を巡る自然環境の維持には必須である事は自明であろう。

高き（山）より低き（平地）に流れる水は重力の作用により、地殻変動で形成された低い部分に集中し、河川となって移動する。河川の疎通能力を上回る水量により、洪水氾濫（水害）が起こる。少ないと渇水になる。現在の日本では、河川は河川法、砂防法により国土交通省、都道府県庁等で水利用と防災のために河川および施設が管理・運用されている。

山の管理には河川とは異なり、『山岳法』はないが、環境省主管で風景、生態系などは自然環境保全法、自然公園法、環境基本法等により保全が図られ、林業と防災は森林法で管理されている。

（アジアモンスーン地域の河川）

河川は気候風土と水の使い方および土地利用により特徴づけられる。アジアモンスーン地域の河川はモンスーンの影響を強く受け、水田灌漑という特殊性があり、世界的に見ると、日本の河川もその範疇にある。

（アジア極東地域の特徴）

国際連合が第2次世界大戦後経済の復興に当たり、ヨーロッパ経済委員会、ラテン・アメリカ経済委員会、アジア極東経済委員会という3つの地域経済委員会を設置した。これら地域経済委員会の中で、アジア極東経済委員会だけに、地域性を考慮して、洪水防御、航行、農業用水、水力発電などを対象とした「洪水防御局」後に「洪水防御水資源問題局」を設けたのである。

（日本の河川の特徴）

洪水問題と共に水田灌漑が重要で、中下流部に河川を横断する頭首工（農業用の堰）が複数所あるのが普通である。河川横断構造物は魚類の溯上の阻害になるため、最近は治水対策に加えて、魚道を設けることなど、生態系に配慮した施設が設置されるようになった。ヨーロッパなどの大陸の大河川では舟運や船舶の航行が重要で、大抵の河川で閘門が設置されているが、同じ横断構造物でも閘門は舟通しの部分が魚道の役目を兼ねているので、アジア以外の河川で開発された魚道は中下流部より、上流部のダム近辺に適した魚道が多い。

かつては、洪水をできるだけ速やかに海へ出す、築堤による洪水快疎主義がとられ、河道の直線化が進められていたが、現在ではダムと組み合わせて、場合によっては中下流部に遊水機能を残し、スーパー堤防（高規格堤防）などの街づくりと連携した治水対策が進められている。

また、川づくりの世界的潮流は、人工的なコンクリート護岸より、自然を模した「多自然型川づくり」が主流となっている。

（了）

ホースシューベンド

ホースシューベンドとは、アメリカ合衆国アリゾナ州ページの町付近にある、コロラド川が蹄鉄の形に蛇行している場所の名前である。グレンキャニオンダムとパウエル湖から少し下流、ページの南約6キロメートルに位置している。国道89号線から1.2キロメートル歩くとたどり着ける。ウィキペディア